

# 音羽・五条坂窯跡（道仙窯）

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告  
二〇一九―一三

音羽・五条坂窯跡（道仙窯）

2020年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所



# 音羽・五条坂窯跡（道仙窯）

2020年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所





# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、宿泊施設新設計画に伴う音羽・五条坂窯跡（道仙窯）の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

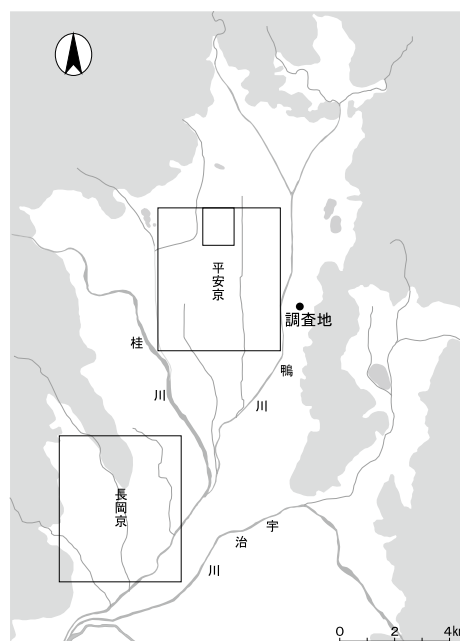
令和2年6月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- 1 遺 跡 名 音羽・五条坂窯跡（道仙窯）（京都市番号 18 S 131）
- 2 調査所在地 京都市東山区五条橋東4丁目448番他
- 3 委 託 者 平安埋蔵文化財事務所株式会社 代表取締役 池田光繁
- 4 調査期間 2019年10月17日～2020年2月14日
- 5 調査面積 157.6㎡
- 6 調査担当者 岡田麻衣子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「五条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 岡田麻衣子
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 15 協力者 調査・遺物整理には下記の方々からご教示頂いた。記して感謝申し上げます。（五十音順、敬称略）  
網 伸也、猪飼祐一、伊勢崎晃一郎、伊勢崎 淳、伊勢崎 創、小田木富慈美、河崎尚志、木立雅朗、清水志郎、西村徳哉、田口 肇、能芝 勉、浜中邦弘、前崎信也、宮川真一

（調査地点図）



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	4
(1) 立地と歴史的環境	4
(2) 道仙窯と現存する五条坂の登り窯	6
3. 遺 構	9
(1) 道仙窯の概要	9
(2) 新段階	9
(3) 中段階	12
(4) 古段階	14
4. 遺 物	16
(1) 遺物の概要	16
(2) 土器類	16
(3) その他の製品	19
(4) 窯道具類	20
(5) 耐火煉瓦	21
(6) 印・銘	22
5. ま と め	25

# 図 版 目 次

図版1	遺構	新段階：平面オルソ画像（1：80）
図版2	遺構	新段階：平面図（1：80）
図版3	遺構	新段階：前庭部立面図・オルソ画像（1：50）
図版4	遺構	新段階：窯東西壁立面図・オルソ画像（1：80）
図版5	遺構	新・中段階：焼成室北壁立面図（1：50）
図版6	遺構	窯断面図（1：80）
図版7	遺構	東側土台（石垣）立面図・オルソ画像（1：50）
図版8	遺構	中・古段階：平面オルソ画像（1：80）
図版9	遺構	中段階：平面図（1：80）
図版10	遺構	古段階：平面図（1：80）

- 図版11 遺構 古段階：前庭部実測図（1：50、1：60）
- 図版12 遺物 土器類実測図1（1：4）
- 図版13 遺物 土器類実測図2（1：4）
- 図版14 遺物 理化学陶磁器実測図1（1：6）
- 図版15 遺物 理化学陶磁器実測図2、その他の製品実測図1（1：4）
- 図版16 遺物 その他の製品実測図2、窯道具類実測図1（1：4、91・92のみ1：6）
- 図版17 遺物 窯道具類実測図2（1：4）
- 図版18 遺物 窯道具類実測図3（1：4）
- 図版19 遺物 窯道具類実測図4（1：4、150～152のみ1：6）
- 図版20 遺物 耐火煉瓦実測図（1：6）
- 図版21 遺構 1 新段階：全景（南から）  
2 新段階：全景（南東から）
- 図版22 遺構 1 新段階：前庭部・焚口（南西から）  
2 新段階：胴木間（西から）  
3 新段階：焚口（南西から）
- 図版23 遺構 1 新段階：三の間（南西から）  
2 新段階：一の間（南西から）  
3 新段階：二の間東入口（南東から）
- 図版24 遺構 1 新段階：六の間・煙室（南西から）  
2 土台（石垣）（南東から）
- 図版25 遺構 1 中段階：全景（南東から）  
2 中段階：胴木間西側スロープ（南西から）
- 図版26 遺構 1 中段階：焼成室基底部（南東から）  
2 中段階：三の間基底部（南東から）  
3 新段階：煙室と中段階：土台（石垣）（西から）
- 図版27 遺構 1 古段階：前庭部（南から）  
2 古段階：排水設備（南西から）
- 図版28 遺構 1 古段階：東側スロープ（西から）  
2 古段階：排水設備（北から）  
3 古段階：土台（南東から）  
4 中・古段階：北側土台（石垣）（北東から）
- 図版29 遺物 施釉陶器・理化学陶磁器・栓・土型・窯道具
- 図版30 遺物 1 窯道具  
2 耐火煉瓦

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：4,000）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	調査前全景（南東から）	3
図4	レーザー測量作業状況（北西から）	3
図5	作業状況（南から）	3
図6	床面検出作業状況（北西から）	3
図7	煉瓦ナンバリング作業状況（北東から）	3
図8	報道発表風景（南から）	3
図9	連房式登窯図	7
図10	五条坂本窯図	7
図11	新・中・古段階：前庭部東西断面図（1：50）	10
図12	印・銘集成図1（1：1、1：2）	23
図13	印・銘集成図2（1：2）	24
図14	窯の変遷模式図（1：100）	25

## 表 目 次

表1	音羽焼と五条坂における窯業の略年表	4
表2	道仙窯の略年表	6
表3	遺構概要表	9
表4	遺物概要表	16
表5	窯の寸法表	26

## 付 表 目 次

付表1	土器類観察表	31
付表2	その他の製品観察表	33
付表3	窯道具類観察表	34
付表4	耐火煉瓦観察表	36



# 音羽・五条坂窯跡（道仙窯）

## 1. 調査経過

本調査は、宿泊施設新設計画に伴う道仙窯の発掘調査である。

調査地は音羽・五条坂窯跡に該当する。周辺は「五条坂」と呼ばれ、江戸時代末以降、京焼の<sup>1)</sup>一大生産地であり、現在も多くの窯元や卸商が建ち並んでいる。

道仙窯は、入江道仙窯・道仙化学製陶所とも呼ばれ、明治から昭和にかけて陶磁器の生産を行っていた。窯の構造は連房式登窯である。

調査に先立つ京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」とする）の試掘調査で、窯に関連する遺構・遺物が確認されていた。<sup>3)</sup>発掘調査は、原因者から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が行った。調査面積は157.6㎡である。

五条坂周辺では、昭和46年（1971）に施行された「京都府大気汚染防止条例」によって登り窯の使用が禁止されて以降、登り窯が次々と解体されていき、明治初頭には20基程あった登り窯も2015年には6基、現在では4基を残すのみである。その内の1基である道仙窯は、半解体のまま放置されていたものの、平成17年（2005）に始まる立命館大学の調査成果などを受けて、数少ない京式登り窯の伝統を受け継ぐ近現代の産業遺産として重要な遺跡であると認識されるに至った。



図1 調査位置図（1：4,000）

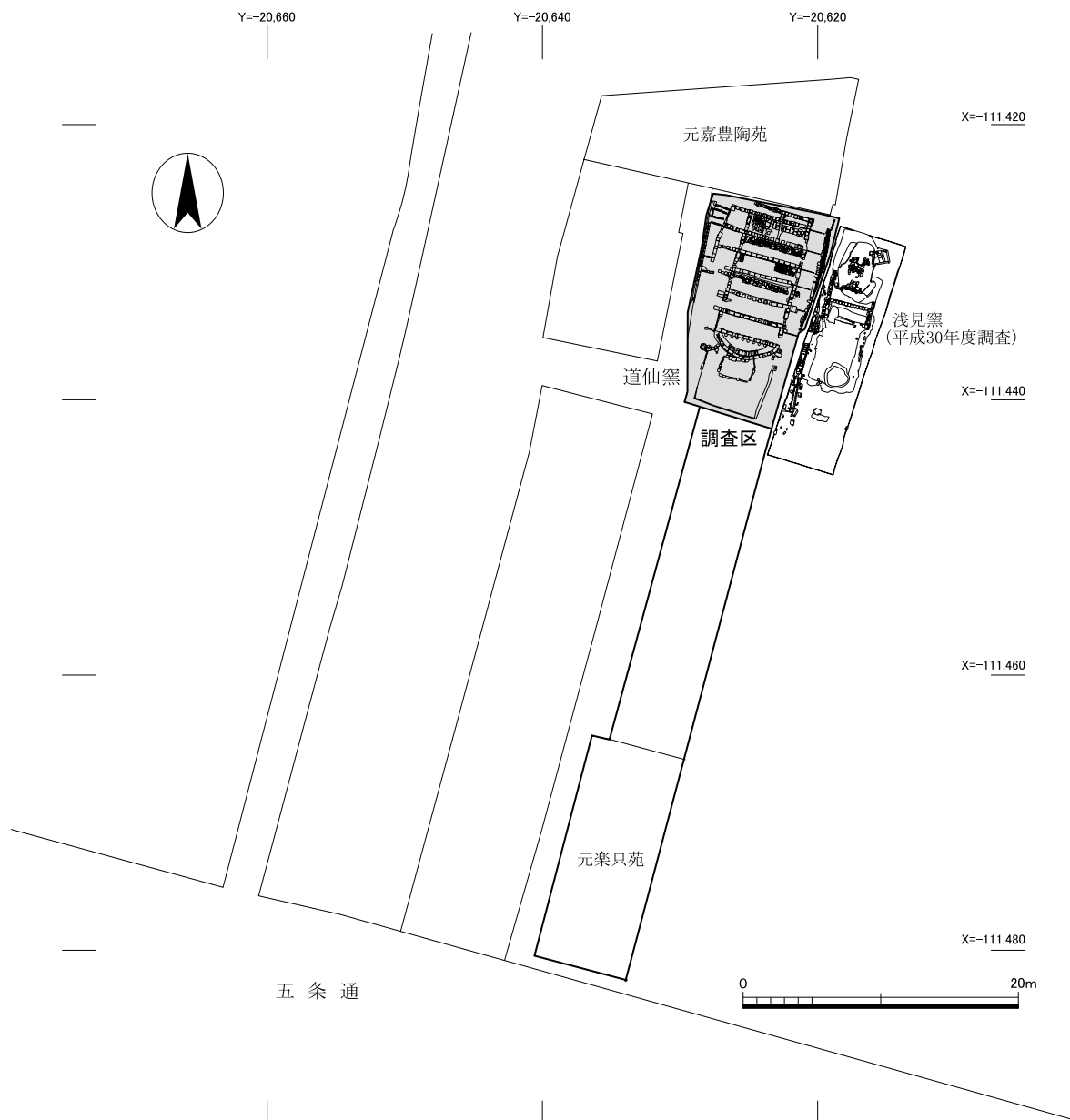


図2 調査区配置図 (1:500)

そのため今回の発掘調査では、窯の現状を記録するとともに構築方法や構造の変遷を明らかにすることを目的とした。

道仙窯は昭和43年(1968)に閉窯した。その後20年近く放置されていたが、窯体の痛みが激しく倒壊の危険があったため、窯の上部は取り壊された。さらに不良品などが置かれていたが、平成17～22年(2005～2010)に立命館大学によって清掃・調査が行われた。今回の調査前は、窯体の下半分と基底部のみが残存していた。

調査は2019年10月17日に窯の上部を覆う屋根を撤去してから開始した。原因者の耐火煉瓦を再利用して窯を造り直したいという意向から、窯体の構築に使用されていた耐火煉瓦1つ1つに番号を付け、少しずつ解体をすすめた。しかし調査開始直後、窯体や構築材の痛みが激しく、それらを再利用して窯を造り直すことが難しいと確認できたため、11月21日に現場作業を一時中断、12月



16日に再度関係者が協議を行った。協議の結果、胴木間から二の間までを現状保存し、それ以外の部分については調査を進めることになった。12月23日に調査を再開し、前庭部・三の間以降の後室を調査した。

調査中は適宜、検証委員である立命館大学の木立雅朗教授、同志社大学の浜中邦弘教授や文化財保護課による指導を受け、図面作成・写真撮影などの記録作業を行い、2020年2月14日に全ての現地作業を終了した。

なお、調査成果を公表するために4月9日には報道発表を行った。



図3 調査前全景（南東から）



図4 レーザー測量作業状況（北西から）



図5 作業状況（南から）



図6 床面検出作業状況（北西から）



図7 煉瓦ナンバリング作業状況（北東から）



図8 報道発表風景（南から）

## 2. 位置と環境

### (1) 立地と歴史的環境 (表1)

本調査地に位置する五条坂一帯は、京都盆地の東にそびえる東山裾部にあたり、鴨川へ向けて傾斜地を形成している。京都から山科へ抜ける五条通（現国道1号線）は、このあたりで急激に傾斜を強め、文字通り「五条坂」となっている。本調査地はこの五条坂に面しているが、五条通の北側には西から轟川の谷状地形が入り込み、地形は緩やかな北下がり呈している。

この地での京焼の生産は、寛永18年（1641）に若宮八幡宮の門前の音羽川沿いで音羽屋惣左衛門が開窯したことによって始まったとされ、寛文6年（1666）頃にはこの音羽川沿いで生産された製品は「音羽焼」と呼ばれていた<sup>4)</sup>。また貞享元年（1684）頃には既に音羽橋沿いに多く陶工が住んでおり、音羽焼として京都の人々に人気が高かったことがわかる<sup>5)</sup>。18世紀初頭に編纂された『京都御役所向大概覚書』によると「清水焼」の項に井筒屋甚兵衛と音羽屋惣左衛門の名が確認でき、こ

表1 音羽焼と五条坂における窯業の略年表

年 代	内 容	稼働登り窯数	註
寛永18年(1641)	若宮八幡宮門前の音羽川沿いで音羽屋惣左衛門が開窯	1基	4
寛文6年(1666)	文献資料における音羽焼の初見 「音羽焼 寛文六年 九月六日 音羽焼の茶碗 茶陶」		5
貞享元年(1684)	文献資料における音羽焼の窯場の初見 「若宮八幡宮...この宮の門前より南へ行く町あり。...その橋を音羽橋といふ。...そのあたりに今焼の器物さまざま営めり、音羽焼として京師をもてはやす。」		6
18世紀初頭	「清水焼」の項に井筒屋甚兵衛・音羽屋惣左衛門の記載	2基	7
天明2年(1782)	五条坂焼物仲間結成、青木木米・奥田頼川らによって京焼磁器開発		
文化元年(1804)	高橋道八・和気龜亭によって本格的に京焼磁器の生産開始		
嘉永5年(1852)	登窯が10基、それを経営する窯元が14軒あり	10基	8
明治5年(1872)	登窯が21基、45人の製造業者あり	21基	9
明治11年(1878)	ゴットフリート・ワグネルによって西洋窯業技術の導入		
明治14～18年 (1881～1885)	貿易不振による不況		
明治27年(1894)～	日清・日露戦争勃発 好景気		
明治45年(1912)頃	登窯は15基あるうち高橋道八窯と三浦竹泉窯の2基が開窯している	13基	12
大正3年(1914)～	第一次世界大戦勃発 好景気 理化学陶磁器輸出の活発化		
大正5年(1916)	濱田庄司 見聞調査	約25基	13
大正7年(1918)～	第一次世界大戦の余波で不況		
大正12年(1923)	関東大震災による不況		
昭和5年(1930)	世界恐慌による不況	約18基	14
昭和6年(1931)	景気回復		
昭和12年(1937)	日中戦争勃発 理化学陶磁器・電磁器など生産		
昭和18年(1943)	会社統制法施行		
昭和20年(1945)	五条通強制疎開		
昭和25～33年 (1950～1958)	内外需要の増加 好景気		
昭和36年(1961)～	ガス窯・電気窯へ移行され始める→煤煙問題深刻化	約17基	15
昭和46年(1971)	京都府大気汚染防止条例施行→登り窯使用禁止	1基	
昭和55年(1980)	京都府陶磁器協同組合の登り窯解体→登り窯による生産終了	0基	

の頃から清水焼と音羽焼の名称が一体化していったことがわかる<sup>7)</sup>。天明2年(1782)には五条坂焼物仲間が結成され、青木木米や奥田穎川らによって京焼磁器が開発される。文化元年(1804)以降には高橋道八や和気亀亭らによって本格的な磁器生産が行われたことに伴い、登り窯は嘉永5年(1852)には10基<sup>8)</sup>、明治5年(1872)には21基<sup>9)</sup>まで増えていった。そして、東山山麓に近づくにつれて傾斜を帯びていく五条通は「五条坂」と呼ばれ、やきものの町として栄えていく。

明治11年(1878)にゴットフリート・ワグネルによって酸化コバルトなどの化学的釉薬の知識が伝授され、また五条坂の実験工場に石炭窯が築窯されることにより、西洋窯業技術の導入・普及が進み、五条坂の窯業がさらに発展することとなる。明治14～18年(1881～1885)は貿易不振に陥いるが、日清・日露戦争を経て、国内の景気上昇に伴い京焼の需要が増加したことで、登り窯の大型化や焼成室の増築が行われ、また共同窯<sup>10)</sup>や貸窯<sup>11)</sup>の制度もつくられた。明治45年(1912)頃には稼働している登り窯が13基に減少しており、やや生産量が低下していたようである<sup>12)</sup>。大正3年(1914)に第一次世界大戦が勃発した際には、諸国の贅沢品の輸入禁止などより一時不況に陥ったが、ドイツの陶磁器生産低下により市場が次第に品薄状態となり、日本製品の価格が高騰した。京焼の作風は美術品よりも日用品へと変化していく。また蒸発皿や坩堝など理化学陶磁器がドイツ製品に代わって輸出されるようになる。大正5年(1916)には京都市陶磁器試験場の技師であった濱田庄司によって五条坂の見聞調査が行われており、登り窯は約25基確認されている<sup>13)</sup>。大正12年(1923)の関東大震災や昭和5年(1930)の世界恐慌などにより日本の陶磁器業界は打撃を受け、五条坂の登り窯も約18基と少なくなっていく<sup>14)</sup>。太平洋戦争に突入すると輸出がほとんど中絶され、軍事利用される電磁器・工業用品・理化学陶磁器以外の日用食器・茶華道用品・工芸品は制限を受け、窯も解体・縮小を余儀なくされた。それに加えて、昭和20年(1945)3月に建物疎開による強制立ち退き命令によって五条通の南側50m程の家並みは強制破壊、若宮八幡宮の門前通も分断され、五条坂の様相も一変する。

戦後には高度経済成長が始まり、エネルギー革命が進む昭和36年(1961)頃には、大量にやきものを焼成できるが燃料コストや窯の維持管理に手間がかかる登り窯から、管理が簡単で燃料コストの安いガス窯や電気窯などへの移行が始まり、登り窯の数は約17基<sup>15)</sup>となった。その後、国道1号線バイパスの建設によって交通網の整備に伴い、陶磁器業に従事しない新規住民の増加があり、登り窯が排出する煙や煤の問題が深刻化していった。昭和46年(1971)には京都府大気汚染防止条例が施行され、煙害問題から登り窯は使用禁止となる。それ以降も京都府陶磁器協同組合が管理する1基の窯のみが煙煤除去装置を設けて稼働していたが、昭和55年(1980)に火災問題から閉窯後解体され、ついに五条坂では登り窯による陶磁器の生産が終了した。

その後、2015年には五条坂に残存する登り窯は6基のみとなっていた。この時点で行政上登り窯は「建造物」として認識されており、遺跡としての保護はされていなかった。しかし急速に再開発が進む中、京都の歴史を考える上での重要性が鑑みられ、2018年に6基の登り窯は「埋蔵文化財」として指定された。

## (2) 道仙窯と現存する五条坂の登り窯

道仙窯（図1-3、表2） 三代目入江道仙によって明治26年（1893）以降に築窯されたと考えられる明治時代から昭和時代の連房式登窯である。

初代入江道仙は、嘉永5年（1852）に五条坂で陶磁器の製造を始めたと伝えられている。しかしその窯の場所については不明である。道仙の名が初めて確認できる文献資料は、明治5年（1872）に編纂された『京都陶磁器説』<sup>17)</sup>である。これによると、丸屋佐兵衛の窯を四ツ目屋仙次郎・道仙岩井屋九郎兵衛と共に使用していることが記述されている。そして二代目から食器や花器、茶陶などの一般的なやきものに加えて理化学陶磁器の製造を開始した。明治26年（1893）には三代目が世襲して、理化学陶磁器製造で隆盛を極めた。平成17～22年（2005～2010）にかけて立命館大学によって発掘調査とともに窯道具などの民具整理・旧事務所に保管されていた会社の文書類の調査が行われている。その際に確認された土地売買の証明書・図面では、入江道仙が明治26年（1893）11月10日に塩竈義誠より京都市下京区五条通橋東4丁目449番地の土地を購入したこと記述されている。また「但し造作付」とあり、この敷地内には瓦葺の平屋建物が6棟あるが登り窯は記述されていない。このことから、この時点では登り窯は造られていなかったことがわかる。そして昭和37年（1962）に編纂された『京焼100年の歩み』の「明治末の五条清水附近窯要図」に「入江道仙（道仙化学）」が確認できる。以上のことから、この道仙窯は明治26年（1893）から明治45年（1912）の間に築窯されたと考える。昭和5年（1930）以降、貸窯を行ったり、月1回は窯の焼成を行ったりと好景気であった。しかし昭和21年（1946）に四代目が世襲するが、戦争の影響や戦後はガス窯や電気窯が普及したことによるコストや大気汚染の問題、理化学陶磁器製造の衰退、さらには職人の技術継承に対応できなかったなどの理由から昭和43年（1968）に閉窯した。

表2 道仙窯の略年表

年 代	内 容	註
嘉永5年(1852)	初代入江道仙が五条坂で陶磁器生産を始める ※窯場は不明	
明治4年(1871)	禁裏御用・舎密局の御用を勤める	16
明治5年(1872)	文献資料における道仙の初見 丸屋佐兵衛・四ツ目仙次郎・道仙岩井屋九郎兵衛と窯を共同使用	17
—	2代目世襲 理化学陶磁器の生産を開始する	
明治26年(1893)	3代目世襲 好景気 現場所に土地を購入 ※登り窯は記述されていない	「土地売買証明書」
明治45年(1912)	文献資料における自窯場の初見「入江道仙 現代所有者 道仙化学」	18
昭和5年(1930)	文献資料における貸窯の初見 浅見窯は休止しており、道仙窯を貸窯にしていた	19
昭和7～9年(1932～1934)	月1回、年10～11回窯焼成を行う 好景気	「伝票」
昭和18年(1943)	会社統制法 施行 道仙化学製陶所 設立 2回の大改修工事	「陶磁器製造用本窯修繕願」
昭和20年(1945)以降	五条通強制疎開・燃料不足・理化学陶磁器業界の技術高度化に対応できず 衰退	「伝票」
昭和21年(1946)	4代目世襲	
昭和43年(1968)	閉窯	「伝票」・「出勤簿」

※「土地売買証明書」・「伝票」・「陶磁器製造用本窯修繕願」・「出勤簿」:道仙化学陶製所の事務所資料

立命館大学による発掘調査の結果、窯の側壁が縮小しているなど複数回の改築工事が行われていたことを確認している。また大量の蒸発皿・耐酸容器・漏斗・ビーカーなどの理化学陶磁器が出土している。また文書類の整理によって焼成のペースや閉窯時期などを確認している。

**井野窯**（図1-4）江戸時代末頃に二代目清水六兵衛の長男である初代清水七兵衛によって当地に築窯された。その後この窯は、明治15年（1882）頃に山村長村、時期は不明だが山本辰之介、明治40年（1907）頃に陶工として初の帝室技芸員となった三代目清風与平、昭和24年（1949）に二代目井野祝峰へと受け継がれていった。

この窯も複数回改修工事が行われていたようで、大正時代に清風与平が所有していた時は、全長10.24m×幅約3.9～4.7m、焼成室を7室もち、各部屋には12～13個の狭間穴があったことがわかっている。また昭和40年代頃、井野窯で作られる盆栽鉢や打ち込み成形と呼ばれる技法でつくられた磁器製品が人気を博し、昭和46年（1971）に作業場と登り窯を一体的なものとして効率化を図るために窯を縮小して築き直したが、その直後に京都府公害防止条例が施行されたため、窯に火を入れることなく使用できなくなった。その後、ガス窯や電気窯を設置するため四の間以降の焼成室が解体され、胴木間から三の間までしか残されておらず、縮小後の部屋数も不明であった。

平成27年（2015）8月に立命館大学によって清掃・民具（窯道具）整理・発掘調査が行われた。発掘調査の結果、基底部のオオゲタの痕跡から昭和46年（1971）に縮小された窯は、焼成室が五の間まであり、窯の幅は縮小されたことがわかった。また、胴木間の東前方に一段階古い床面を確認し、清風与平が所有していた大正期の窯は、閉窯時と比べて大きかったことを確認している。<sup>21)</sup>

平成27年（2015）の調査後、井野窯は一時現状保存されていたが、宿泊施設の建設に伴い解体されることとなり、平成29年（2017）に当研究所によって再度発掘調査が行われた。調査の結果、江戸時代末に清水七兵衛が所持していた時の窯体は確認できなかったが、立命館大学の調査によって確認されていた昭和46年（1971）までの窯の様相の確認に加えて、清風与平が所有していた大正期の窯の様相も確認している。<sup>22)</sup>

**浅見窯**（図1-2）平成30年（2018）まで道仙窯の東側に隣接して現存していた。別名祥瑞窯とも呼ばれる。先述した道仙窯は、明治26年（1893）に土地を購入した証明書が確認されていることから、明治26年（1893）以降に築窯されたと考えられる。道仙窯と浅見窯は、隣接しており、

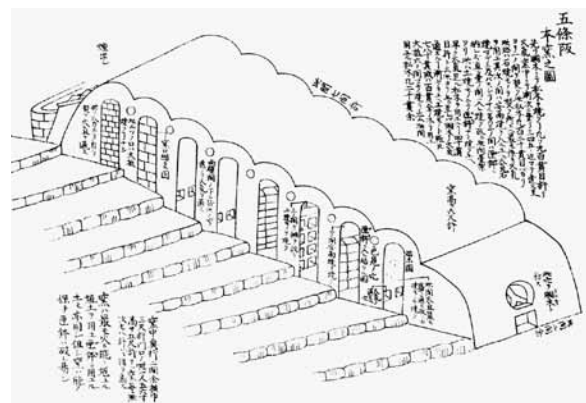
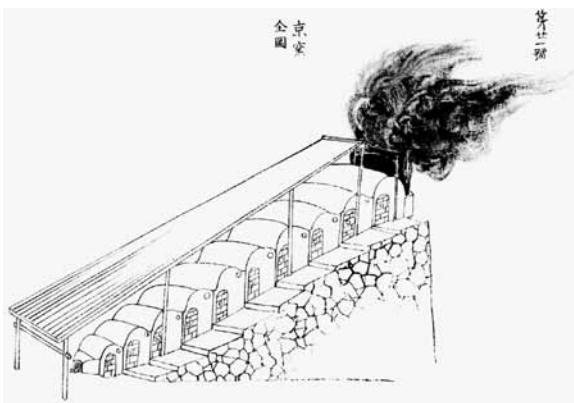


図9 連房式登窯図（『京都陶磁器説図』より転載） 図10 五条坂本窯図（『京都陶磁器説図』より転載）

焚口と煙室の向きをお互い反対方向にしている点などから考えて、同時期・計画的に築窯された可能性が高い。明治末の窯要図には、道仙窯と浅見窯が隣接して描かれている。これらのことから、道仙窯と同様に明治26年（1893）から明治45年（1912）の間にこの地に築窯されたのではないかと考えられる。当地の浅見窯が築窯される前に初代浅見五郎助は嘉永5年（1852）に五条坂に開窯したと伝えられているが、存在を裏付ける資料などは確認できない。また閉窯した時期がわかる資料も確認されていないが、おそらく五条坂で煙煤公害問題が深刻化する昭和40年代だと考えられる。

平成30年（2018）、宿泊施設建設に伴い当研究所により発掘調査が行われた。調査前の解体作業によって窯の上部及び三の間以降の後室は壊され、前庭部から二の間の基底部がごく一部のみ残存している状態であった。調査の結果、一時期古い胴木間を検出し、道仙窯と浅見窯の間に暗渠を確認している。このことから浅見窯の胴木間は最低1回は改修工事が行われていることが明らかになった。<sup>23)</sup>

小川窯（図1-5） 現在の場所に明治9年（1876）に築窯されたと伝えられる窯であるが、年代を裏付ける資料は確認できない。平成19年（2007）には、京都市の景観重要建造物に指定されている。初代小川文斎と二代目小川文斎はこの地で内地向磁器や京都伊万里焼を生産していた。五条坂で登り窯による生産がなくなって以降、胴木間・焼成室・煙室がセットで残存する貴重な登り窯であったが、平成30年（2018）4月隣地で行われていた工事の振動によって焼成室と煙突が大きく破損して問題となった。<sup>24)</sup> 発掘調査は行われていない。

河井寛次郎記念館窯（図1-6） 大正9年（1920）に河井寛次郎が五代目清水六兵衛から現在の場所にあったこの窯を譲り受けた。そのため、築窯年代は不明である。現在この窯は、河井寛次郎記念館で展示保存されている。発掘調査は行われていない。

藤平窯（図1-1） 明治42年（1909）に京都陶磁器合資会社によって築窯された窯である。当時この窯では、花瓶などをはじめとする輸出用製品の素地を主に焼成されており、京都では最大規模といえる生産体制を誇っていた。その後、昭和20年（1945）に藤平窯業有限会社に所有が移る。戦時中には陶器製手榴弾など金属製品に代わる陶磁器製品などの生産が行われ、戦後には理化学陶磁器や民芸陶器など多種多様な製品が生産された。

築窯された当初は2基の登り窯が向かい合って、焼成室は全部で17室もある巨大な窯であったが、その内の1基（西側）が石炭窯を築くために取り壊された。現在は平成20年（2008）に京都市教育委員会によって購入され、「五条坂京焼登り窯」として、窯・煙突・作業場が保存されている。

平成27年（2015）に立命館大学によって発掘調査が行われている。

### 3. 遺 構

#### (1) 道仙窯の概要

調査地は、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地する。隣接する浅見窯との関係性<sup>25)</sup>から、道仙窯では南側に焚口を設けている。このため、地形に逆らった盛土により、北から南へ傾斜する土台<sup>26)</sup>を造り、その上に窯を構築している。窯体は、南から胴木間と呼ばれる燃烧室、後方に6室の燃烧室、北端に煙室をもつ連房式登窯である。平面形は馬蹄形、焚口は1箇所、構築部材にはオオゲタ・マクラ・クレと呼ばれる京都特有の耐火煉瓦<sup>27)</sup>を使用し、「横狭間」<sup>28)</sup>構造で、「京式」・「京窯」と分類される登り窯<sup>29)</sup>である。今回の調査によって、窯体の基底部分、築窯時の土台・石垣を検出し、当窯における改修工事の変遷を明らかにすることができた。

前庭部・胴木間・焼成室・煙室・土台は、それぞれ複数回の修復が行われており、その中でも2回の大規模な改修工事があったことが確認できた。これに基づき、新しいものから順に「新段階」・「中段階」・「古段階」の3時期に大別して、以下に概要を述べる。

#### (2) 新段階（図版1～5・21～24）

調査開始段階では、窯体の上部が取り壊れされており、南から前庭部、胴木間（燃烧室）、焼成室（一～六の間）、煙室の順に残存していた。前庭部及び胴木間は地表面から一段掘り下げ、焼成室より後側は北上りに造成された土台の上に築造されている。

この時期の窯体の規模は、全長11.2m、幅4.8mあり、前庭部と煙室の床面の高低差は2.58mである。また、窯の西側には最大幅2m、東側には約1mの作業用通路が設けられている。以下、各部分ごとに解説する。

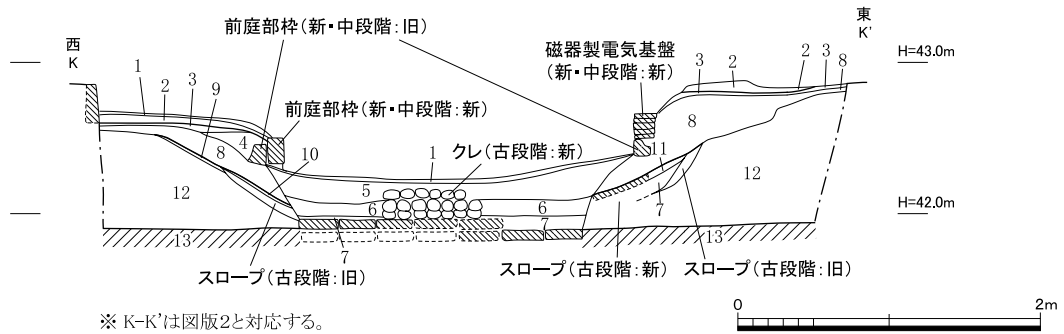
なお、窯各室の規模については内法の規模を示す。

**前庭部**（図11、図版22） 上段は、幅5m、奥行最大5mで、地表からの深さは約0.45mである。南側の擁壁は、並形煉瓦を積み上げる。下段は焚口に面した部分をさらに幅2.4m、奥行1.4m、深さ0.4mの方形にくぼめる。底面は薄く黒褐色微砂を叩き締めて作業面とし、焚口の前は棚板片を並べて敷く。壁面は石材や磁器製の電気基盤を積み上げる。

**胴木間**（図版22） 平面形は半円形を呈し、円弧の頂点に焚口が位置する。幅4.8m、奥行1.8m

表3 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
古段階	前庭部、窯、土台(石垣)、水溜1・2、土坑3、焼土面4	
中段階	前庭部、窯、土台(石垣)	
新段階(閉窯時)	前庭部、窯、土台(石垣)	



- |   |                                     |
|---|-------------------------------------|
| 1 7.5YR4/2灰褐色 微砂 強く締まる 素焼片含む                        | 7 10YR2/1黒色 炭                       |
| 2 2.5Y4/2暗灰黄色 微砂 2.5Y5/6黄褐色微砂ブロック含む 強く締まる           | 8 7.5YR4/4褐色 粗砂 煉瓦・窯道具・陶磁器片多量含む     |
| 3 10YR2/1黒色 微砂 2.5Y5/6黄褐色微砂ブロック含む 強く締まる<br>(新段階作業面) | 9 5Y7/4浅黄色 シルト 粘性強い                 |
| 4 2.5Y5/2暗灰黄色 細砂                                    | 10 10YR2/1黒色 炭                      |
| 5 10YR5/2灰黄褐色 細砂～粗砂                                 | 11 2.5Y6/8明黄褐色 粗砂 φ3cm程度の礫多量含む      |
| 6 7.5YR7/8黄橙色 細砂～粗砂 粘性強い                            | 12 10YR3/2黒褐色 微砂～細砂 やや粘性有り 中世土師器片有り |
|   | 13 10YR3/1黒褐色 シルト 粘性強い(地山)          |

図11 新・中・古段階：前庭部東西断面図（1：50）

である。外面は主にオオゲタで構築されており、西側は後述する中段階の窯を縮小した際にクレが使用されている。焚口はロストルと呼ばれる灰落しを中心に、アミダと呼ばれる上段、火口と呼ばれる下段から成る。しかし、調査時には下段の火口のみが残存していた。火口は幅0.35m、高さ0.4mで、下には棚板を敷き、その上に隅切したオオゲタを縦方向に積んでいる。焚口の内側左右には、棚板と耐火粘土用いた幅0.4m程のスロープが設けられている。内側の立ち上がり部分は並形煉瓦で構築されており、上面は亀腹状に盛り上がっている。床面からの高低差は1.2mである。立ち上がり部分と外壁との間には、円柱状のロストルの痕跡だけが残っていた。一の間は、幅0.2m、高さ0.4mで、ほぼ等間隔に配置されている。11箇所確認でき、面取りしたオオゲタの先を南へ立てて並べ、柱として形成し、一を間の床面と同じ高さの「横狭間」構造である。

一の間（図版23） 平面形は幅4.35m、奥行1.2mの長方形である。床面は平らで、前方は叩き締められた細砂で形成され、奥壁に沿って棚板の痕跡が認められる。床面は1度貼り直されている。側壁は割れたオオゲタやマクラ、大量の粘土を用いて構築される。側壁前方部には出入口があり、東側は幅0.5m、西側は0.7mである。奥壁は中段階の壁を利用して構築されており、1度基底部から積み直されている。各種煉瓦を組み合わせ、9段目まで残存している。下からオオゲタの平手、2段目は並形煉瓦を板状に切ったもの、3段目は並形煉瓦の小口を縦方向にしたもの、4段目が半裁したオオゲタ、5段目は並形煉瓦を板状に切ったもの（ここまでが中段階の壁）、6段目が並形煉瓦の小口を縦方向にしたもの、7段目が並形煉瓦を小口・長手を交互に組んだもの（ここに狭間穴が設けられている）、8段目以上はオオゲタの平手である。奥壁の狭間穴は11箇所が確認できる。いずれも幅0.2m、高さ0.3mの長方形で、ほぼ等間隔に配置されている。二を間の床面と同じ高さの「横狭間」構造である。一の間と二の間における床面の高低差は0.4mである。

二の間（図版23） 平面形は幅4.35m、奥行1.2mの長方形である。床面は平らで、前方は叩き締められた細砂で形成され、奥壁に沿って棚板の痕跡が認められる。床面は1度貼り直されている。側壁は割れたオオゲタやマクラ、大量の粘土を用いて構築される。側壁前方部には出入口があり、



東側は幅0.5m、西側は0.5mである。奥壁は中段階の壁を利用して構築されており、1度基底部から積み直されている。各種煉瓦を組み合わせる5段目まで残存している。下から割れたマクラの小口（ここまでが中段階の壁）、2と3段目がオオゲタの長手と割れたオオゲタの組み合わせ、4段目がマクラの小口を3重（ここに狭間穴が設けられている）、5段目がオオゲタの平手である。奥壁の狭間穴は10箇所が確認でき、外壁との関係から本来は11箇所であったと推定できる。いずれも幅0.2m、高さ0.3mの長方形で、ほぼ等間隔に配置されている。三の間の床面と同じ高さの「横狭間」構造である。二の間と三の間における床面の高低差は0.4mである。

**三の間**（図版23） 平面形は幅4.4m、奥行1.3mの長方形である。床面は平らで、前方は叩き締められた細砂で形成され、奥壁に沿って縦0.4m、幅0.3mの棚板が13枚1列に並べられている。側壁は割れたオオゲタやマクラ、大量の粘土を用いて構築される。側壁前方部には出入口があり、東側は幅0.4m、西側は0.6mである。奥壁は中段階の壁を利用して構築されており、1度基底部から積み直されている。各種煉瓦を組み合わせる8段目まで残存しているが、北へ大きく倒れている。下から1・2段目が割れたマクラを前に出して配置、3段目がマクラの小口、4段目がオオゲタの平手（ここまでが中段階の壁）、5段目がマクラの小口を3重（ここに狭間穴が設けられている）、6段目以上がオオゲタの長手である。奥壁の狭間穴は12箇所が確認でき、大半は幅0.18～0.2m、高さ0.25mの長方形で、ほぼ等間隔に配置されているが、西寄りの2箇所は幅0.1m、高さ0.25mと狭く、間隔が短い。四の間の床面と同じ高さの「横狭間」構造である。三の間と四の間における床面の高低差は0.3mである。

**四の間** 平面形は幅4.38m、奥行1.2mの長方形である。床面は平らで、前方は叩き締められた細砂で形成されている。奥壁に沿って並形煉瓦やクズ煉瓦を台にして、その上に縦0.4m、幅0.3mに棚板を並べている。側壁は割れたオオゲタやマクラ、大量の粘土を用いて構築される。側壁前方部には出入口があり、東西ともに幅0.5mである。奥壁は中段階の壁を利用して構築されており、1度基底部から積み直されている。各種煉瓦を組み合わせる5段目まで残存している。下からオオゲタの平手、2段目がオオゲタの平手（ここまでが中段階の壁）、3段目がマクラの小口を3重（ここに狭間穴が設けられている）、4・5段目がオオゲタの平手である。奥壁の狭間穴は11箇所が確認でき、いずれも幅0.2m、高さ0.28mの長方形で、ほぼ等間隔に配置されている。五の間の床面と同じ高さの「横狭間」構造である。四の間と五の間における床面の高低差は0.36mである。

**五の間** 平面形は幅4.6m、奥行1.2mの長方形である。床面は平らで、前方は叩き締められた細砂で形成されている。奥壁に沿って並形煉瓦やクズ煉瓦を台にして、その上に縦0.4m、幅0.3mに棚板を並べている。ただし、西端は棚板の代わりにオオゲタを使用する。側壁は割れたオオゲタやマクラ、大量の粘土を用いて構築される。側壁前方部には出入口があり、東側は幅0.4m、西側は幅0.5mである。奥壁は中段階の壁を利用して構築されており、1度基底部から積み直されている。各種煉瓦を組み合わせる4段目まで残存している。下から1～3段目は割れたマクラを前に出して配置、4段目がマクラの小口3重（ここに狭間穴が設けられている）である。奥壁の狭間穴は11箇所が確認でき、いずれも幅0.2m、高さ0.28mの長方形で、ほぼ等間隔に配置されている。六の

間の床面と同じ高さの「横狭間」構造である。五の間と六の間における床面の高低差は0.38mである。

**六の間** (図版24) 平面形は幅4.2m、奥行1.3mの長方形であるが、中央に高さ約0.3mの粘土とクズ煉瓦によって南北方向の壁があり、東西2室に分かれる。ただし、東側壁にのみ幅0.5mの出入口が認められることから、中央の壁は仕切り程度のものであった可能性が考えられる。西側の床面には棚板の破片が全面に敷き詰められ、東側には奥壁に沿って縦0.4m、幅0.3mの棚板が6枚一列に並べられている。奥壁は中段階の壁を利用して構築されており、各種煉瓦を組み合わせで6段目まで残存している。下から1・2段目が割れたアーチ煉瓦、3段目がマクラの小口、4・5段目がマクラの小口（ここまでが中段階の壁）、6段目がマクラの小口と長手の組み合わせがおそらく3重である（ここに狭間穴が設けられている）。奥壁の狭間穴は9箇所が確認でき、いずれも幅0.2m、高さ0.25m以上の長方形とみられ、やや間隔にばらつきが見られる。煙室の床面と同じ高さの「横狭間」構造である。

**煙室** (図版24) 平面形は幅約4.1m、奥行0.3～0.4m、やや西側が広い方形である。中央にクズ煉瓦で作られた南北方向の壁があり、東西2室に分かれる。壁の基底部は穴明き煉瓦で、その上を割れたクレやアーチ煉瓦を積んでいる。煙室内部の壁には大量の煤が付着していた。

**作業用通路** 窯の両側には、一の間から煙室まで作業用通路が設けられている。東側は幅約1mで一の間脇から登り斜面となり、煙室脇までの高低差は1.8mとなる。一の間後部、二の間後部、六の間後部付近に小さい段差が設けられている。

西側は前庭部付近で幅0.7m、一の間付近で幅1.8m、煙室付近で幅1.4mである。傾斜部分には中段階の隔壁の基底部を利用した階段が設けられている。また、通路の西側下部にも幅0.5～1.3mの通路と階段が付加されている。

**土台 (石垣)** (図版7・24) 一の間付近から煙室後部までは、窯の傾斜を造り出すため幅8.7m、奥行8.6m範囲で土台が構築されており、高低差は1.7mである。ただ地形が北に傾斜しているため、煙室付近では盛土の厚さは2.3mとなる。土台の東側には擁壁が組まれている。構築材は、前方部は陶磁器片や匣鉢などの窯業廃棄物、中部は石材、後部は煉瓦積みになっており、後述する窯の変遷に合わせて拡張されていったものとみられる。

### (3) 中段階 (図版8・9・25・26)

前庭部・胴木間・焼成室 (一～六の間) の基底部、土台となる石垣を検出した。前庭部及び胴木間は地表面から一段掘り下げ、焼成室より後側は北上りに造成された土台の上に築造されている。

この時期の窯体の規模は、全長10.4m、幅幅5.4～5.6mで、前庭部と六の間の床面の高低差は2.5mである。また、窯の東西側には作業用通路がある。

**前庭部** (図11) 前庭部は上下2段構造になっている。上段は、幅4.8m、奥行最大5mで、地表からの深さは約0.46mである。南側の擁壁は、並形煉瓦を積み上げる。下段は焚口に面した部分をさらに幅2.6m、奥行1.5m、深さ0.3mの方形にくぼめる。底面は薄く黒褐色微砂を叩き締めて作

業面とし、焚口の前は棚板片を並べて敷く。壁面は石材や磁器製の電気基盤を積み上げる。

**胴木間** (図版25) 平面形は半円形で、円弧の頂点に焚口が位置する。幅5.6m、奥行1.8mである。焚口(火口)の下には棚板が敷かれている。焚口の内側左右には、棚板と耐火粘土を用いた幅0.4m程のスロープが設けられているが、西側のスロープは新段階の改修工事に伴い削平され、残存していない。奥壁は2時期確認でき、一段階古い基底部に穴明き煉瓦を使用していたことを確認した。内側の立ち上がり部分は並形煉瓦で構築されており、上面は亀腹状に盛り上がっている。床面からの高低差は1.2mである。

**一の間** 平面形は幅5m、奥行0.9mの長方形である。床面は平らで、焼土の上面に灰白色のはなれ砂が敷かれた痕跡が認められる。側壁の出入口は確認できない。奥壁は5段目まで残存している。下からオオゲタの平手、2段目は並形煉瓦を板状に切ったもの。3段目は並形煉瓦の小口を縦方向にしたもの、4段目が半裁したオオゲタ、5段目は並形煉瓦を板状に切ったものである。奥壁の基底部は2時期確認でき、一段階古い奥壁の基底部には穴明き煉瓦を使用していたことを確認した。狭間穴については不明である。一の間と二の間における床面の高低差は0.24mである。

**二の間** 平面形は幅5m、奥行1.2mの長方形である。床面は平らで、前方は焼土の上面に灰白色のはなれ砂が敷かれた痕跡が認められる。側壁の出入口は確認できない。奥壁は1段目のみ残存している。割れたマクラの後ろにマクラを配置している。狭間穴については不明である。二の間と三の間における床面の高低差は0.28mである。

**三の間** (図版26) 平面形は幅4.7m、奥行1.2mの長方形である。三の間より後側は幅がややすぼまる。床面は平らで、前方は焼土から成形されている。側壁の出入口は確認できない。奥壁は4段目まで残存している。下から1・2段目が割れたマクラを前に出して配置、3段目がマクラの小口、4段目がオオゲタの平手である。狭間穴については不明である。三の間と四の間における床面の高低差は0.28mである。

**四の間** 平面形は幅4.6m、奥行1.2mの長方形である。床面は平らで、前方は焼土から成形されている。側壁の出入口は確認できない。奥壁は2段目まで残存している。下からオオゲタの平手、2段目がオオゲタの平手を使用され、その下に棚板、匣鉢敷、粘土を敷く。狭間穴については不明である。四の間と五の間における床面の高低差は0.24mである。

**五の間** 平面形は幅4.5m、奥行1.2mの長方形である。床面は平らで、前方は焼土から成形されている。側壁の出入口は確認できない。奥壁は新段階の最下段に使用されていた割れたマクラを外した段階で検出した。4段目まで残存していた。1～3段目がマクラの小口、4段目がマクラを薄く切ったものである。奥壁の狭間穴は10箇所が確認でき、外壁との関係から16箇所程あったのではないかと推定される。規模はややばらつきがあり、大半が幅0.16m、高さ0.12m以上の長方形で、ほぼ等間隔に配置されている。六の間の床面と同じ高さの「横狭間」構造であったと推定される。五の間と六の間における床面の高低差はほぼ0mである。

**六の間** 平面形は幅4.6m、奥行0.9mの長方形である。床面は平らで、前方は焼土から成形されている。側壁の出入口は確認できない。奥壁は5段目まで残存している。下から1・2段目が割れ

たアーチ煉瓦、3～5段目がマクラの小口である。また、六の間の北壁には狭間穴が確認できなかったこと、煤などが付着していないことや後述する石垣とのスペースがないことから、煙室は六の間の上部に取り付けられていたと考えられる。

**土台（石垣）**（図版7） 一の間付近から煙室後部までは窯の傾斜を造り出すため全長8.4m、幅8mの範囲で土台が構築されている。北端の土台は六の間を追加するために盛られている。

#### （4）古段階（図版10・27・28）

中段階に大規模な改修工事が行われているため、窯体の中央部分は大きく削平されていたが、前庭部・胴木間・煙室の基底部・土台となる石垣の一部を検出しており、この時期における窯の概要を確認できた。

この時期の窯体の規模は、検出できた遺構の基底部分から全長9.6m、幅5.6mであったことが想定できる。

**前庭部**（図11、図版27・28） 規模は幅3.4m、奥行1.6mで、地山及び室町時代の整地土を皿状に掘りくぼめて作られている。北東部には胴木間の壁に沿って木材を横たえた階段が設けられている。南東部には窯道具を転用して構築された東西2m、高さ0.6mの中段（図版10・11 M-M'）、南側には耐火煉瓦と東西2.5m、高さ0.6mの壁を確認した（図版11 N-N'）。

**前庭部（排水設備）**（図版11・27・28） 前庭部の作業面の下層には、陶器製の土管が埋設されており、焚口付近から南へとのび、水溜1に接続されている。焚口付近に溜まった水分を水溜に集めて排水するための施設であると考えられる。水溜1は、前庭部南西部で検出した。掘形は円形で、東西0.65m、南北0.55mあり、直径0.5mの陶器製の枠が使用されている。地山を掘り込んで作られており、深さは検出面から0.35m、底部の標高は41.45mである。水溜2は、前庭部南東部で検出した。直径0.5mの木製の枠が使用され、地山を掘り込んで作られている。深さは検出面から0.35m、底部の標高は41.45mで、水溜1と同じである。

**胴木間** 調査区南側で基底部の一部を検出した。奥行約2.8m、幅5.6mである。焚口の内側左右には、焰が後室へ上がるためのスロープが設けられていた。また、胴木間では小規模な改修工事が行われていたことを確認した。スロープは新旧あり、古いスロープは土を均した上に耐火粘土を貼り付けて構築している。新しいスロープはその上に棚板と耐火粘土で貼り直している。焚口付近の床面には棚板が敷かれており、古い棚板の上面に新しい棚板を敷き直していた。内部の立ち上がり部分の基底部はオオゲタで構築されており、焚口付近の奥はオオゲタの前面に割れたクレを貼り直していた。

**煙室** 調査区北部で窯体の基底部の北端と考えられる2列のみ検出した。北列は溝状の掘り込みの中に粘土を貼り付け、その上に耐火煉瓦であるマクラを積み上げて構築していた痕跡を確認した。煉瓦には自然釉はなく、煤が多量に付着していた。南列には、サヤ敷きや棚板の破片が敷かれ、その上に粘土が棒状に貼られていた。おそらく、この上に耐火煉瓦を積んでいたものと考えられる。北列とは違い、煤・自然釉などは付着していない。検出した耐火煉瓦の状態から、焼成室の

基底部や壁ではなく、焼成室の後方に据え付けられた煙室の可能性が考えられる。

土台（石垣）（図版7） 調査区北部、窯体から1.4m北側で検出した。整地土と思われる黒褐色土の上面に40cm程の大きさに割られた花崗岩を乱雑に積み上げており、2段確認した。東側土台（石垣）は窯道具や陶磁器片、理化学陶磁器を転用して造られている。

焼土面4（図版11） 調査区南西隅の前庭部高まりで縦1m、幅1mの調査区を設けて確認した。排水管が設置されていた痕跡が確認でき、さらにその下には窯の下面のように堅く焼けた面を確認した。小さな窯または錦窯などを設置していた可能性が考えられる。検出規模は南北0.6m、東西0.5mである。

## 4. 遺 物

### (1) 遺物の概要

道仙窯は大量に廃棄された陶磁器類、窯道具、耐火煉瓦を用いて土台を造り、その上に築窯されている。すべての遺物を持ち帰ることが困難であるため、やむを得ず選択して最終的に50箱の遺物を取り上げた。

出土遺物には、土器・陶磁器、その他の製品、窯道具、耐火煉瓦、金属製品などがある。そのうち全体の8割以上を陶磁器・窯道具が占める。遺物の時期は、幕末から明治時代初頭を中心に室町時代、明治時代半ばから昭和までのものがある（表4）。印・銘については項を立てている。別図を参照して頂きたい（図12・13）。

### (2) 土器類（図版12～15・29、付表1）

**新段階：南端拡張区出土土器（図版12）** 1は施釉陶器の小椀である。高台はロクロケズリ、外面は濃緑釉に文字が書かれ、内面ハケで白泥が塗られた後に透明釉が施される。高台内には浅見五郎助の印が押される。

**新段階：煙室出土土器（図版12）** 2は施釉陶器の椀の底部である。永樂善五郎の作品である可能性が考えられる。3は染付磁器の筒形椀の底部である。高台内部に「平安兼山」と書かれる。

**新段階：焼成室床面出土土器（図版12・29）** 一～六の間修復の際に使用されたと考えられる嵩上げ土から出土した。

4は染付磁器の小椀である。全体に透明釉が施され、外面に篆の「木」の字状の文様が手描きさ

表4 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代	土師器				
幕末～ 明治時代初頭	施釉陶器、磁器、染付磁器、土製品、窯道具、煉瓦		陶器1点、施釉陶器2点、磁器7点、染付磁器2点、土製品1点、窯道具12点、煉瓦2点		
明治時代 ～昭和時代	土師器、陶器、施釉陶器、磁器、染付磁器、土製品、窯道具、煉瓦		土師質土器2点、陶器2点、施釉陶器4点、磁器16点、染付磁器14点、土製品2点、窯道具41点、煉瓦1点		
昭和時代	土師器、施釉陶器、磁器、染付磁器、土製品、窯道具、煉瓦、金属製品		土師質土器1点、陶器1点、施釉陶器6点、磁器16点、染付磁器8点、土製品1点、窯道具33点、煉瓦12点		
合 計		63箱	187点（13箱）	0箱	50箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より13箱多くなっている。

れる。5は染付磁器の小椀である。底端部はロクロケズリ、内外面に白釉、高台内部には透明釉が施され「萬珠堂」の印が押されている。「萬珠堂」とは五条大和太路にあった陶器商である。卸売先の印を押して製作していたことが考えられる。6は施釉陶器の急須蓋である。口縁部がロクロナデ、上面を黄釉、内面を透明釉が施されている。内面には浅見五郎助の印が押されている。7～9は染付磁器の小型椀蓋である。7は内面の中心と外面の周りに「壽」、ツマミの内面には「福」と書かれる。8にもツマミの内面には形が崩れているが「福」と書かれている。9は内面の中心に麒麟が描かれ、ツマミの内面には「直陶製也」と書かれている。10は磁器の小瓶底部と考えられる。外面は青磁釉、内面は透明釉が施されている。高台内面には、「大日本永樂造」と書かれている。頭に「大日本」と書かれたものは、幕末から明治初頭以降、京焼が外国人に人気を博し、海外への輸出を意識されて製作されたもので永樂善五郎が用いた銘と考えられる。11は染付磁器の小椀である。高台はロクロケズリ、内外面に白釉が施される。高台内には「福」が表現される。12は染付磁器の椀である。高台内には「福」が表現される。13は施釉陶器の灯明皿である。底部から外面体部をロクロケズリ、内面と口縁部に薄緑釉を施す。内面には格子状の沈線があり、見込みには目痕が確認できる。

**新段階：土台出土土器**（図版12） 窯東側石垣の新段階造成部分を解体する際に出土した。14は磁器の仏花具である。高台内部には幹山伝七が用いた銘である「幹山精製」が書かれている。幹山伝七は文久元年（1861）に産寧坂周辺で開窯し、幹山陶器株式会社を設立するが明治18年（1885）に工場を売却し、その後自宅で明治23年（1890）まで製作していた。このことから1861～1890年頃の作品と考えられる。15は施釉陶器の小椀である。高台から外面体部はロクロケズリ、内面をロクロナデ、全体に黄釉に鉄釉が施される。高台は3方向に三角形の切り込みがあり、内部に浅見五郎助の印が押される。

**中段階：前庭部出土土器**（図版12） 前庭部構築土から出土した。16は磁器の小椀蓋である。ツマミ内面には形が崩れているが「福」と書かれている。17は施釉陶器の徳利である。底部は水切り、体部から口縁部はロクロナデで成形している。全体に鉄釉を施し、白泥で3方向に○に佐、卯二十八、中瀬の文字が書かれている。

**中段階：土台出土土器**（図版13） 18は染付磁器の仏花具底部である。高台内部に「大日本永樂造」と書かれている。幕末から明治時代初頭以降のものである。19は染付磁器の椀蓋である。ツマミ内面には形が崩れているが「福」と書かれている。20～24は小椀で、20～23は染付磁器、24は施釉陶器である。それぞれ高台内部には20は高橋道八が用いた「道八」、21は「瑞鳳精製」、22は「永翁」、23は宮川香齋が用いたと考えられる「大日本真葛造」と書かれ、24は小川文齋の「文齋」印が押されている。25～29は椀で、28が施釉陶器、それ以外が染付磁器である。それぞれ高台内部に25は「直陶製也」、27は「亀水造」、29は「乾山」と書かれている。27は何代目のものかはわからないが村田亀水が用いた銘である。亀水は江戸時代後期頃、音羽川周辺にあった音羽屋の窯を買取、生産を始める。四代目に踏襲すると窯を松原通いへ移窯する。28には「晴雲山」が押されている。作者は不明であるが、明治初頭頃に清水坂周辺で焼かれたものである。

中段階：焼成室床面出土土器（図版13） 修復の際に嵩上げ土から出土した。30は染付磁器の椀蓋である。焼け歪んでいるが、ツマミの内面には「大日本鳳瑞製」と書かれている。

古段階：前庭部出土土器（図版13・29） 中段階の前庭部を埋める際に使用したガラから出土した。31・32・34は小椀で、31は染付磁器、32は磁器、34は施釉陶器である。31の高台内部に幹山伝七が用いた銘である「幹山精製」が書かれている。1861～1890年頃の作品と考えられる。32は全体に透明釉、高台内部に透明釉と浅見五郎助の印が押されている。34は高台がロクロケズリ、全体に釉が施される。外面には「入江」、内面には「應専寺」と書かれ、高台内部に浅見五郎助の印が押されている。道仙窯の所有者である入江家の菩提寺のものと考えられる。33は施釉陶器の椀、35は染付磁器の椀である。33は高台から外面体部をロクロケズリ、内面をロクロナデ。底部には初代から二代目の村田永翁のものと考えられる「永翁」印が押される。幕末から明治時代初頭のものと考えられる。35は見込みには麒麟が描かれ、高台内部には「大日本翁山造」と書かれている。

理化学陶磁器（図版14・15・29 36～62） 理化学陶磁器とは、工業や薬品の分野において使用される瓶などの生産・貯蔵容器や蒸発皿・乳鉢等の実験用陶磁器のことである。今回出土したものの名称・用途については、道仙窯と同じく五条坂で理化学陶磁器を生産していた高山耕山化学陶器株式会社の1940年カタログを参考にした<sup>30)</sup>。

40は施釉陶器、47・48は陶器、その他は磁器である。36は薬品など液体を入れる瓶である。内外面ともに白釉、口縁部から肩部に緑釉が施される。口縁内部はねじ口構造になっている。液体を入れたあと、密閉性を高めるための加工である。37は集酸瓶の上に被せるポットカバーである。平面形は楕円形で、内外面ともに透明釉が施され、2つの垂直に上がる口が付く。その上に管をつなげる。38は用途不明品である。内外面ともに透明釉が施される。注口を持ち、「道仙造」と呉須で書かれている。39は集酸瓶の口縁部から体部である。内外面ともに白釉が施され、口縁端部は平らで面をもつ。体部に下がりながらすぼまる。40は保温または保冷瓶である。内外面ともに青みがかった灰釉が施される。注口をもち、内部は2重構造になっており、保温または保冷する機能をもつ構造になっている。41は集酸瓶の体部であり、内外ともに白釉が施され、内面に突帯がある。42は集酸瓶の底部である。内外ともに白釉が施され、底部はロクロケズリされ、注口をもつ。43は集酸瓶の底部である。内外ともに白釉が施され、底部の中心に直径11cm程の孔がある。44はポットカバーと考えられる。口縁端部は平らで外反する。45の集酸瓶である。内外面ともに白釉が施され、口縁端部は面を持ち、口縁部はやや内湾する。口縁部内面に溝状の線刻がされている。46は集酸瓶の底部である。底部は内部にやや盛り上がり、体部は垂直に立ち上がる。47は集酸瓶と集酸瓶を繋ぐ際に使用する蛇管である。道仙窯では古段階の前庭部に排水設備の管として転用されていた。調整は外面をナデ、内面は酸や毒ガスにも耐えられるように透明釉が施されている。48も同様のものと考えられるが、内面に釉薬は施されていない。49～51は蛇管と集酸瓶を繋ぐためのコックと考えられる。52は集酸瓶など大型瓶を高く積み上げた塔中へ酸液を撒布する際に使用するスプラッシャーと考えられる。全体に白釉が施され、頭部には6方向の孔をもつ。53は小型のポットカバーと考えられる。頂頭部に透かしをもつ。54は合子蓋、55は合子身である。全体に透明釉が



施され、口縁端部にはアルミナ砂が塗られている。56は蓋である。口縁部にはアルミナ砂が塗られている。57は平底の蒸発皿である。調整は底部から体部をロクロナデで成形されており、内面及び外面の口縁部に透明釉を施す。片口をもち、口の右下に「道仙」と呉須で書かれている。58・59は乳棒の柄である。8角形に面取りがされており、全体に透明釉が施されている。60は乳棒の先端部である。ロクロで成形しており、上部はくぼむ。くぼみに柄などを差し込み使用するものと考えられる。61・62は丸底の蒸発皿である。調整はともに底部から体部をロクロで成形されており、内面及び外面の口縁部に透明釉を施す。61は片口をもち、口の下に「造仙道」と呉須で書かれている。62にも同様の片口が付くものと考えられる。

### (3) その他の製品 (図版15・16・29、付表2)

63・64は土師質の皿である。作陶時の絵具入れか。調整はともに底部を糸切り、内外面をロクロナデ。63の底部には「小川文斎」、64には見込みに「大」と線刻されている。65・66は焼き上がりの釉薬の色を確認するためのテストピースである。65は磁器で、66は染付磁器の小椀の破片を転用している。67は土型である。調整は外面をロクロケズリのちナデ、内面をナデ。見込みに浅見五郎助の印が押されている。68は顔料のもととなる鉱物などの原料を粉碎し、粉末にするのに使用する施釉陶器の乳棒である。柄は7角形に面取り、端部は丸味をおび、調整はロクロケズリのちナデ。先端は使用により摩耗する。緑釉がかかり、印が押されている。

69は水挽き後ある程度乾燥した作品を伏せて高台などを削り出す際に使用する道具・シッタである。底端部はロクロケズリ、外面と内面をロクロナデ。外面には線刻がされている。70は土を水簸するための鉢である。素焼で底部はナデ、外面をロクロケズリのちナデ、内面はナデによって成形されている。

71は有孔の陶板である。径1cm程の孔がランダムに配置されている。72・73は磁器製の電気基盤である。金具を取り付ける窪みやネジ穴が加工され、全体に白釉を施す。

74は小型の蓋である。天井部は平らで体部はわずかに外方へ開く。外面は型成形で、内面には粘土を詰め込んだ跡が残る。磁胎であるが無釉。

75・76は栓である。75は磁器製で、半球状の頭部、柱状の体部、皿状の尾部からなる。型成形であり、頭部から体部下半まで透明釉が施される。体部にゴムパッキンが装着されることが考えられる。76は陶製で、平らな頭部と細長い体部からなる。手づくね成形で粗雑なつくりである。

77～80は磁器製の把手である。77・78は半球状の頭部、短い体部、皿状の台座からなる。頭部から体部にかけて透明釉が施される。79・80は扁平な球状の頭部からなる。ほぼ全面に透明釉が施される。いずれも内部は中空でここに把手の金具が装着されることが考えられる。

81～84は機械栓あるいはスイング栓と呼ばれる磁器製の瓶栓<sup>31)</sup>である。頭部に横向きの孔が貫通し、ここに機械栓の金具が装着され、体部にはゴムパッキンが装着される。81の断面は台形状の頭部と短くくびれた体部からなり、頭部に透明釉が施される。82～84の断面は逆台形の頭部と長い体部からなり、頭部に透明釉が施される。また、83の頭部上面には「富久娘」、84の頭部上面には

「大塚精醸」と呉須で文字が書かれる。

85・86は機械栓の土型である。85は横方向の型で、中央に金具を通すための孔が貫通し、周辺にはもう片面の型を受ける凹みが3方向に認められる。裏面には縦に長い「十」のヘラ書きがある。86は縦方向の型で、中央には体部を形作る孔、両側には金具を通すための孔が貫通している。両端にはもう片面の型を受ける凹みが認められる。裏面には「十一」のヘラ書きがある。

#### (4) 窯道具類 (図版16～19・29・30、付表3)

87・88、93～110は匣鉢である。京都ではゴウとも呼ぶ。製品を焼成する際に製品を匣鉢の中に入れて匣鉢を積み上げて焼成する。こうすることによって製品に灰がかからないのに加えて匣鉢で密閉されて熱が均一に伝わる。今回の調査で出土した匣鉢は、ビンサヤ型・円形平底型・円形丸底型・筒形平底型・平底四角型に分類することができる。

87と88は瓶栓用のビンサヤ型の匣鉢である。底部はロクロケズリのちナデ、外面体部はロクロナデで成形されており、口縁部及び内面には断熱用の化学塗料が塗られている。87には瓶栓の先を入れる孔があり、88には瓶栓の先を立てる孔があり、口縁部分に半孔がある。

89と90は円形匣鉢の蓋である。匣鉢を積み上げた一番上に被せたり、上に小型の匣鉢を重ねる際に使用する。89は笠型の蓋である。口縁から体部をロクロナデによって成形されており、内面には化学塗料が塗られている。上面には重ね焼きの痕跡が確認できる。90は円盤型の蓋である。判別できないがヘラ状の工具で文字を書き、上面に大量の自然釉が付着している。内面には化学塗料が塗られている。

91と92は円形匣鉢敷きである。ともに内外面ロクロナデで成形されており、91の端部は四角く、92は端部の上端をつまみ上げる。また、紐粘土が円形状に付着していることから蓋として使用していた可能性も考えられる。

93～100は円形平底型の匣鉢である。底部及び外面をロクロケズリのちナデ、内面をナデ成形している。94には「浅ヨ」、96には「与」、97には「花のマークか □」、93には読み取れないが鉄釉で文字が書かれている。98には口縁部に半孔がある。

101～105は筒形平底型の匣鉢である。底部及び外面をロクロケズリのちナデ、内面をナデ成形している。101には初代から二代目の宮川香齋が用いた印である「香齋」の印が押されている。幕末～大正時代初頭頃のものである。初代から二代目には五条坂に宮川家所有の登窯があり、乾山写しや楽焼など多種多様な作品を制作していた。<sup>32)</sup>商品と同じ印を押していることから貸窯を使用する際にその商品の専用の匣鉢として制作したものと考えられる。江戸時代末から大正時代のものである。104には「㊦」の印が押されている。105には口縁部に重ね焼きをした時に使用したと思われるトチンが付着している。

106～108は円形丸底型の匣鉢である。底部及び外面をロクロケズリのちナデ、内面をナデ成形している。106には「◇くま」とヘラ状の工具で線刻が施されている。口縁部に半孔がある。

109・110は四角形平底の匣鉢である。底部及び外面をロクロケズリのちナデ、内面をナデ成形

している。109はプレス機のようなもので造られており、4方向に半孔がある。110は四角形平底型の匣鉢が2つ重なったものである。底部及び外面をロクロケズリのちナデ、内面をナデ成形している。下の匣鉢は上下逆を向いており、器高の高い製品を焼成する際に合子のようにして焼成していたことが考えられる。

111～116はツクである。焼成室の床面に棚板を敷き、その間にツクを支柱として使用し、棚を作る。そしてその棚に製品や製品を入れた匣鉢を並べて焼成する。すべて手捏ねによって成形されている。111は「コ」と鉄釉で文字が書かれている。112は上から圧力で変形しており、未焼成の状態で使用されていた可能性がある。113底部にはトチンの痕跡が確認できる。114は「㊦」、115は「㊦㊦」、116は「信治」の刻印がある。

117～119は棚板である。全てナデによって調整されてされている。117は片面にトチンの痕がコの字形に残り、四角形匣鉢が置かれて焼成されていたことがわかる。118は片面に直径10cm程の輪トチンの痕があり、この上にハマか円形の匣鉢を置いて焼成されていたことがわかる。119は両面に直径15cm程のトチンの痕があり、この上に円形匣鉢を積み上げて焼成されていたことがわかる。

120～152はハマ・チャツ・トチンであり、製品の台部分や匣鉢の底などに敷いて使用する。120～125は円形のハマで全て手捏成形である。126・127にはピンが付いていた痕跡がある。128・129は四角形のハマで手捏成形である。129には村田永翁が用いた「永翁」の印が押されている。何代目のものかはわからない。商品と同じ印を押していることから貸窯を使用する際に専用のハマとして制作したものと考えられる。130～136は断面が逆台形のハマで全て上面はナデ、外面をロクロケズリのちナデによって調整されている。130～134には中心に孔がある。133には清水六兵衛が用いた「清六」の印が押されている。何代目のものかはわからない。商品と同じ印を押していることから貸窯を使用する際に専用のハマとして制作したものと考えられる。

137・138はチャツで外面をロクロケズリのちナデ、内面をナデによって調整されており、口縁部にはアルミナ砂が塗られている。139・140は断面形が台形のチャツでナデによって成形されている。140には中心に孔がある。

141～152は輪トチンで141～148が手捏成形で、149～152はナデによって調整されている。146は三角錐状のピンが付いている。147は粘土紐を指圧で成形している。

#### (5) 耐火煉瓦 (図版20・30、附表4)

153～155は窯体上部のアーチ部分に使用されるクレである。円柱状に手捏ねで成形されており、体部には粘土との密着度を高めるため、斜めまたは格子状の刻み目が施されている。焼成室の内面にあたる小口面は被熱を受けている。155の端部は正方形に面取りされている。

156・157は各焼成室の温度を確認するために窯の側面に設けられていた色見孔の蓋として使用する煉瓦である(「色見煉瓦」と仮称する)。手捏ねで円錐形に成形し、ナデで仕上げる。先端部は焼成室の内面に接していたため被熱している。小口面について156は平ら、157は中心がくぼむ。

158は窯体を構築する耐火煉瓦である(「並形煉瓦」と仮称する)。プレス機で生産されており、

煉瓦の平手面には「KS KAWARO MITSUISHI I」という印が押される。この煉瓦は昭和19年(1944)に設立された川崎炉材株式会社の岡山県三石工場で生産されていたものである<sup>33)</sup>。

159は新段階の煙室を構築するために使用されていた穴明き煉瓦である。プレス機で生産されており、平手面には約7.5cmの方形穴が2つあいている。

160は平面形が台形で中心に凹凸の突起をもつ建築用の煉瓦である(「アーチ煉瓦」と仮称する)。この煉瓦を上下逆交互にして使用することによってアーチ状に積むことができる。道仙窯では、どの箇所で使用されていたのかはわからない。

161・162は窯体の構築に使用される京式登り窯の特徴でもあるマクラである。ナデで成形されており、162は角を削り面取りしている。両平手面には、道仙窯の所有者である入江道仙の印と考えられる「入い」が押される。今回の調査では縦24cm×幅24cm×厚さ10cmのマクラと縦24cm×幅24cm×厚さ8cmのマクラを確認しており、この印が押されものは厚さ10cmの厚いマクラのみである。窯を築造する際にマクラも製作していたことがわかった。

163は窯体を構築するために使用する京式登り窯の特徴でもあるオオゲタと呼ばれる耐火煉瓦である。ナデで成形されており、平手面には「MKK SK32」と押されている。SK32については耐火温度の指数と考えられる。

## (6) 印・銘 (図12・13)

(2) 土器類から(5)耐火煉瓦で掲載した出土遺物に押された印や書かれた銘(図12)のほか、印・銘が確認できたものを以下に提示する(図13)。

164～176は匣鉢に押されていた印である。京都では貸窯・共同窯制度があるため、窯道具も自分の道具を使用するが、その場合は鉄釉でマークや名前を記入する。そのため、これらは作者の印というよりも匣鉢の制作・販売業者の印と考える。いずれも中段階土台より出土した。

177～183は匣鉢に線刻されたマークである。同様に匣鉢の制作・販売業者の印と考えられるが、内容が読み取れない。いずれも中段階土台より出土した。

184～187は並形煉瓦に押された製造会社の印または責任印である。184は明治26年(1893)に創業した片山煉瓦株式会社の刻印か。185は明治8年(1875)に設立された品川白煉瓦株式会社で生産されていたものである。称号に「品川」が使用されるようになるのは明治20年(1887)からである。186は「O.Y.H.<sup>34)</sup>」と押している。187は「TURUMI」と押している。昭和9年～19年(1934～1944)まで操業していた鶴見窯業の刻印か。また、並形煉瓦には他にも「共□社製」・「三石耐火煉瓦株式会社 ニトヤキ」・「石川三石耐火煉瓦株式会社」の押印も確認している。三石耐火煉瓦株式会社は明治25年に設立され、「ニトヤキ」は三石耐火煉瓦会社のブランド商品であるニトヤキのことである。いずれも新段階窯の構築材である。



図12 印・銘集成図1 (1:1、1:2)



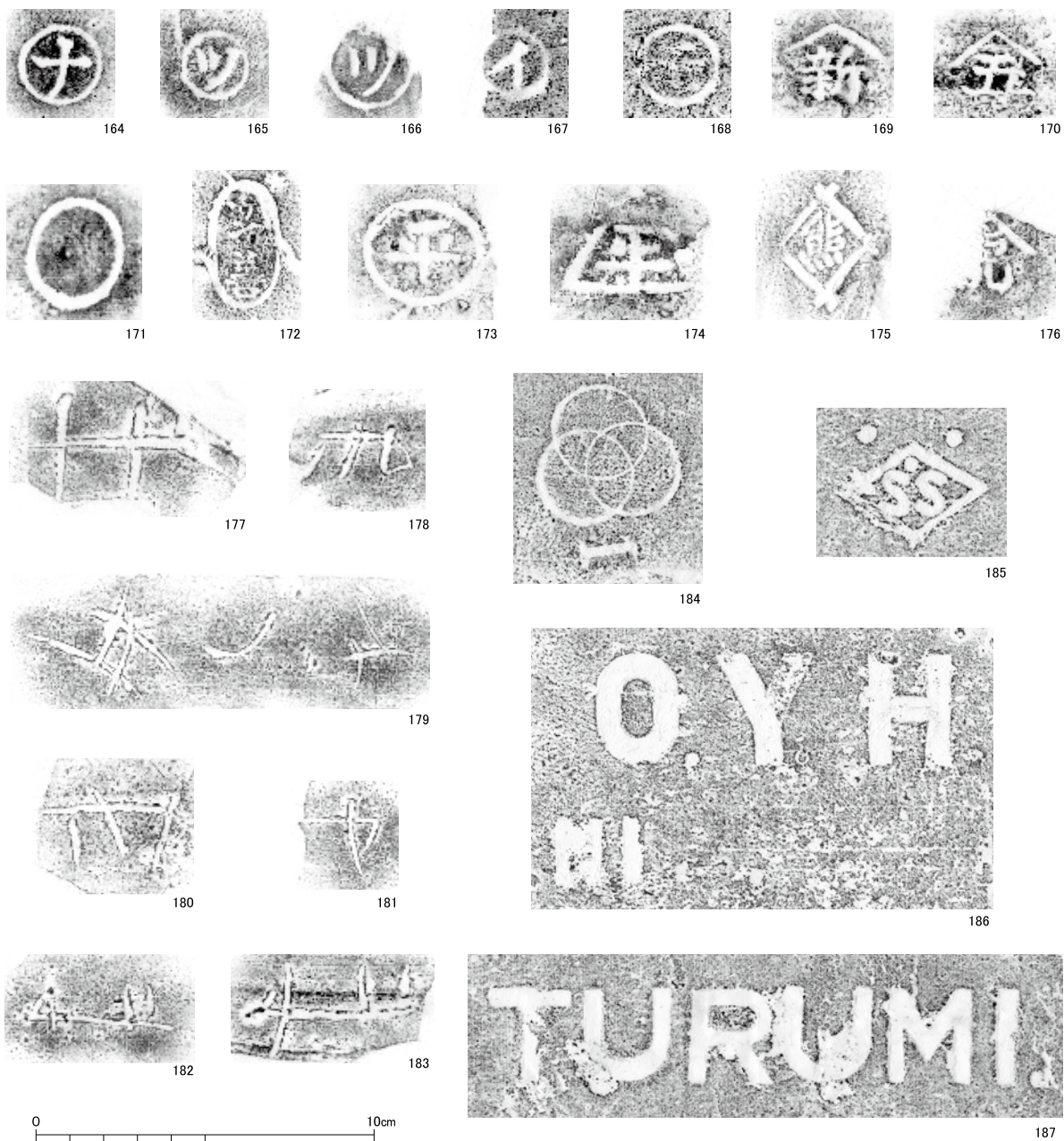


图13 印·銘集成图2 (1:2)

## 5. まとめ

今回の調査で道仙窯は古段階から新段階まで3時期の変遷があることが明らかとなった。以下、変遷の概要をまとめると、古段階の窯は新・中段階のものよりも約1.5m南側に築かれており、窯体の規模は、全長9.6m、幅5.6mある。敷地の関係から地形とは逆方向に南から北に上がる土台を築き、その上に窯が構築されている。中段階には土台の北側・西側を拡張し、窯体も北にずらして新たに築き直している。窯体は胴木間・焼成室6室からなり、全長10.4m、幅5.4～5.6mと古段階よりも拡大している。新段階には中段階の窯体を利用して西側を約0.8m縮小している。窯尻には新たに煙室を設け、全長11.2m、幅4.8mとなっているが、焼成室の面積は縮小していく。

次に各段階の変遷について検討する。

まず、新段階の窯は立命館大学が整理した道仙化学製陶所の事務所資料における「ロクロ師の出勤簿」「伝票」によって、昭和43年（1968）に閉窯した窯であることが明らかである。次に現在地における道仙窯の開窯時期を窺う重要な資料として明治26年（1893）の土地売買証明書がある。その証明書には、今回の調査地である京都市下京区五条通橋東4丁目449番地の土地をもとの地主である塩竈義誠より明治26年（1893）11月10日に購入していることが書かれ、また付図には建物が記載されており、まだ窯が築かれていないことがわかる。つまり、この地に窯が構築されたのはそれ以降ということになる。したがって、この地における窯の操業期間は明治26年（1893）以降から昭和43年（1968）の最大75年間ということなる。

さらに昭和18年（1943）に京都府に提出された窯の修理に関する書類である『陶磁器製造用本窯修繕願』には、修繕以前の窯が書かれた付図がある。この書類によると修理以前の窯は、規模「東西18尺（5.4m）、高さ6尺（1.8m）、延長31尺（9.3m）、6袋」であることがわかる。この規模は、今回検出した古段階のものに近い。

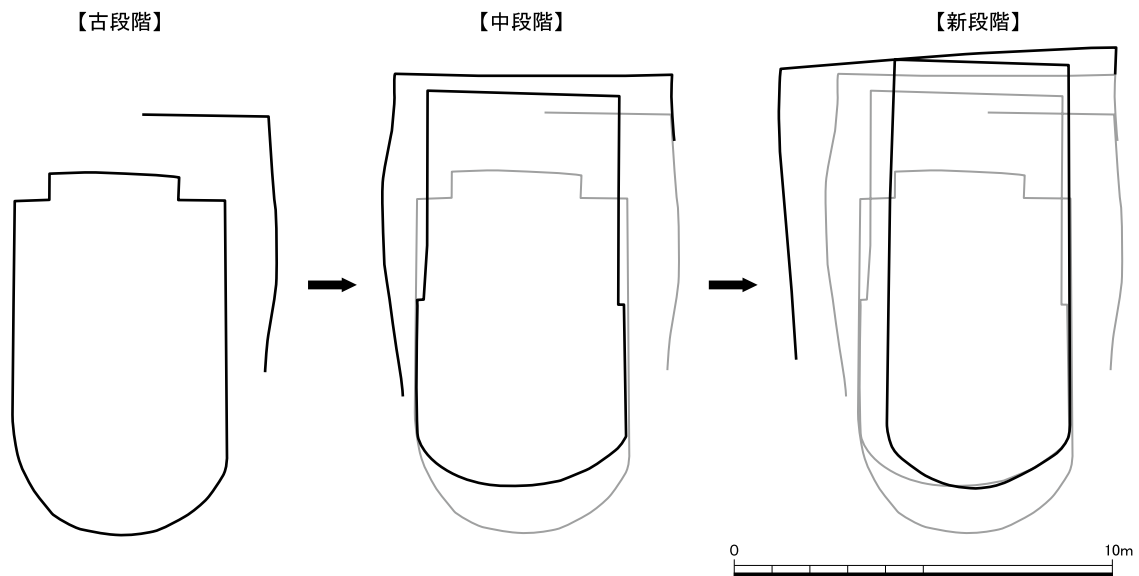


図14 窯の変遷模式図（1：100）

表5 窯の寸法表(単位:m)

		古段階	中段階	新段階
窯体	全長	9.6	10.4	11.2
	幅	5.6	5.4~5.6	4.8
胴木間	幅	2.8	5.6	4.8
	奥行	5.6	1.8	1.8
	狭間穴 (幅×高さ)	—	—	11個 0.2×0.4
一の間	幅	—	5.0	4.35
	奥行	—	1.2	1.2
	狭間穴 (幅×高さ)	—	—	11個 0.2×0.4
二の間	幅	—	4.7	4.35
	奥行	—	1.2	1.2
	狭間穴 (幅×高さ)	—	—	11個 0.2×0.3
三の間	幅	—	4.7	4.4
	奥行	—	1.2	1.3
	狭間穴 (幅×高さ)	—	—	12個 0.18~0.2 ×0.25
四の間	幅	—	4.6	4.35
	奥行	—	1.2	1.2
	狭間穴 (幅×高さ)	—	—	11個 0.2~0.28
五の間	幅	—	4.5	4.6
	奥行	—	1.2	1.2
	狭間穴 (幅×高さ)	—	10個以上 0.18×不明	11個 0.2×0.28
六の間	幅	—	4.6	4.2
	奥行	—	0.9	1.3
	狭間穴 (幅×高さ)	—	—	9個 0.2× 0.25以上
煙室	幅	3.0	—	4.1
	奥行	0.4	—	0.3~0.4

※ 窯体・胴木間の寸法は外法、焼成室・煙室の寸法は内法の規模を示す

の部屋は陶器、後室には素焼きを焼成する。また、出土した陶磁器片の中には五条坂周辺で活動していた陶芸家や窯元の印・銘が多数確認できた。京式登窯の特徴の一つである共同窯・貸窯制度によって他の陶芸家や窯元が道仙窯を借りて作品・製品を焼成していたものと考えられるものもあるが、特に古・中段階の土台の埋土には、道仙窯の築造時期よりも古い幕末から明治時代初頭頃に五条坂周辺で陶磁器を生産していた陶工の作品が多数確認できる。このことから、古段階の窯の土台は道仙窯で生産されていた製品ではなく、五条坂周辺で捨てられた製品<sup>35)</sup>、中段階の窯の土台は道仙窯の製品と幕末から明治時代初頭頃に五条坂周辺で廃棄された製品を用いて造成されたのではないかと考える。

また、道仙窯を特色づける遺物に理化学陶磁器がある。京焼の技法を用いて製作される道仙窯の商品は、質の高さや技法は当時世界でもトップクラスであったといわれている。今回の調査で出土した理化学陶磁器の中には、蒸発皿・乳棒などの実験器具と耐酸瓶・集酸瓶・蛇管などの化学産

以上から、古段階の窯は明治26年(1893)以降から昭和18年(1943)まで、中段階の窯は昭和18年(1943)以降、新段階の窯は昭和43年(1968)までと考えることができる。中段階から新段階のものへの移行は、戦後の復興期による需要増加とその後の燃料革命による登窯の衰退を考慮すれば、昭和30年代頃(1960年初頭)と考えるのが妥当である。

次に出土遺物からみた道仙窯の実態をみてみよう。先述したように今回の調査ではやむを得ず遺物の選択的取り上げを行った。今回持ち帰った遺物量は、道仙窯の本来の遺物量から考えると約10%に過ぎない。しかし、これらの出土遺物の整理作業を行うことによって、当時の生産体制や生産技術などの道仙窯における生産の様相を十分に確認することができた。道仙窯の遺物は、近現代における京焼生産の実態にせまる大変重要な資料だと考える。

調査では、陶器・磁器など多種多様な土器類が出土している。これは、京焼の登窯では、陶器・磁器・素焼きを全て一緒に焼成する特徴をもつからである。焼成室である胴木間から近い温度の高い前方部の部屋は磁器、中間



業用器具がある。理化学陶磁器は古段階時から出土しているが、道仙窯で生産されていたことがわかる「道仙」や「道仙造」などが書かれた理化学陶磁器は中段階の土台から多く出土していることから、道仙窯が開窯した当初である明治26年（1893）頃から既に生産されていたことがわかる。道仙窯産の理化学陶磁器が供給先の例として大阪市中之島蔵屋敷跡が唯一判明しており、蒸発皿・漏斗・カッセルの取手などが出土している<sup>36)</sup>。中之島蔵屋敷跡で出土している理化学陶磁器に書かれている銘は全て手書きであるため、本調査における古段階または中段階時のものであると考えられる。また、今回の調査では確認できなかったが、平成17～22年（2005～2010）に行われた立命館大学の調査（今回の調査における新段階）では、「C.C」・「白井度量衡器製作所」・「菊水製作所」など社名や「京都道仙」がプリントされた理化学陶磁器が採集されている。このことから新段階時より製薬会社から受注を受け生産しており、銘もプリントへ移行したことがわかる。

おわりに 今回の調査で道仙窯における窯体の下部構造・改修履歴を明らかにすることができた。登り窯の改修履歴は、窯の基底部にしっかりと残っている。地中に埋まった遺構の変遷を確認する考古学的手法が大変有効であることが証明できた。また窯体の構造や変遷の過程を全面的に調査できたことは、京焼の歴史の解明にとって極めて重要な成果と言えるのではないだろうか。今回の調査が今後、近現代の京焼研究の一助となれば幸いである。

先述したように、平成27年（2015）には閉窯した6基の窯が残されていたが、開発の波にのまれ、現在では道仙窯を含めて4基のみとなってしまった。道仙窯は大変幸いなことに株式会社インテリックスのプロジェクトで窯体の一部が保存され、窯跡を文化遺産として活用されることとなった。道仙窯は京焼・五条坂の活性化を担う大変重要な遺跡となるだろう。

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳【第9版】』京都市文化市民局 2020年  
窯の名称については、遺跡地図の表記に統一した。
- 2) 本報告書において京焼とは、「近世以降に京都で生産されたやきもの」と定義する。
- 3) 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成30年度』京都市文化市民局 2019年
- 4) 嘉永5年(1852)に編纂された『当時窯持由緒記』には、窯の所在地・持ち主・由緒が記述されている。その中で音羽焼の名称を屋号に冠した音羽屋惣左衛門が大仏境内鐘鑄町で窯を所有していたことがわかる。(中ノ堂一信「京焼音羽・五条坂の変遷」『東洋陶磁』15・16合併号 1988年に所収)
- 5) 鹿苑寺の鳳林承章の日記である『隔蓑記』には、鳳林承章が焼きものを入手した時期が記述されている。「音羽焼 寛文六年 九月十日 音羽焼 茶陶」とあり、これが文献史料における「音羽焼」の初見である。また、この時点では音羽焼と清水焼は別項目になっている。(赤松俊夫編『隔蓑記』思文閣出版 1997年復刻版)
- 6) 洛中洛外の寺社や名勝について記述されている『菟芸泥赴』には、「若宮八幡宮...この宮の門前より南へ行く町あり。...そこの橋を音羽橋といふ。...そのあたりに今焼の器物さまざま営めり、音羽焼として京師をもてはやす」とある。(北村季吟『菟芸泥赴』1684年、中ノ堂一信「京焼音羽・五条坂の変遷」『東洋陶磁』15・16合併号 1988年に所収)
- 7) 岩生成一編『京都御役所向大概覚書』下巻 1973年  
「音羽焼」と「清水焼」が一体化したことについて中ノ堂一信氏によると、当時最大の京焼産地であった粟田や全国の有名窯業地と競い合っていくには名前がもつブランド力が必要であった。そこで全国的にも有名な清水寺を彷彿させる「清水焼」という名前がもつブランド力は、更なる発展を目指す五条坂の窯元にとって極めて魅力のあるものだったと述べている(中ノ堂一信『京焼 伝統と革新』淡交社 2018年)。
- 8) 『当時窯持由緒記』1852年
- 9) 藤岡幸二編『京焼100年の歩み』財団法人京都陶磁器協会 1962年
- 10) 複数の製造業者や窯元が共同して窯を使用する制度。寄合窯とも言う。
- 11) 窯の持ち主が1間、1立(棚板1枚を積み上げて1立)ずつ小製造元や窯元へ貸し出す制度。
- 12) 註9)に同じ  
「明治末の五条清水附近窯要図」には、17基の登窯が記載されており、そのうち五条坂の登窯は15基ある。しかし、高橋道八窯と三浦竹泉窯は閉窯している。
- 13) 前崎信也編『大正時代の工芸教育－京都市陶磁器試験場附属伝習所の記録－』宮帯出版社 2014年  
松林鶴之助による「濱田先生登り窯講義」の記録より。
- 14) 河合磊三「五条坂における窯の分布」『都市と芸術』205号 1930年
- 15) 藤岡幸二『現代における登り窯と貸窯の概要』財団法人京都陶磁器協会 1966年
- 16) 塩田力蔵「日本陶工伝」『陶器講座 第2巻』雄山閣
- 17) 『陶磁器説』『陶磁器説図』(藤岡幸二編『京焼百年の歩み』附録 財団法人京都陶磁器協会 1962年)
- 18) 註9)に同じ
- 19) 註14)に同じ
- 20) 註13)に同じ

- 21) 木立雅朗・岡田麻衣子「近現代登り窯の発掘調査－京都市 井野祝峰窯・奈良市 赤膚山元窯の事例－」『一般社団法人日本考古学協会 第82回総会 研究発表要旨』 日本考古学協会 2016年
- 22) 木下保明『六波羅政庁跡・京焼窯跡（井野祝峰窯）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017－12 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2018年
- 23) 木下保明『音羽・五条坂窯跡（浅見五郎助窯）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2018－1 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2018年
- 24) 「京都東山 京焼登り窯がホテル工事で破損 市の重要建造物」毎日新聞 2018年4月10日
- 25) 互いの煙を避けるために計画的に築造された（米田浩之・木立雅朗「道仙化学製陶所窯跡 第5次発掘調査成果報告」『立命館文学』627号 2012年）。また、浅見家と入江家は当時親戚関係にあった（木立雅朗教授にご教授頂いた）。
- 26) 京都特有の間口が狭く、奥行きが長い敷地に窯を築くことが多いため、地形を利用してして築窯できないことがある。その場合は窯の位置に合わせて土台を人工的に造成する。土台（造成土）には湿気抜きのために粗砂・陶磁器片・窯道具・煉瓦などの窯業廃棄物を混ぜ込んでいる。
- 27) 窯体の構築材には、主に壁材は「オオゲタ」と呼ばれる直方体と「マクラ」と呼ばれる立方体の耐火煉瓦が用いられ、胴木間や焼成室の天井のアーチ部は円柱状の「クレ」と呼ばれる耐火煉瓦が用いられる。
- 28) 狭間穴とは、各焼成室の壁下部に設けられた焰の通り道のことである。また、後ろの焼成室と同じ高さに設けられた狭間穴を「横狭間」構造という。
- 29) 京式登窯の特徴として、以下のものが挙げられる。  
窯の平面形は馬蹄形を呈し、焚口は1つで「胴木間」と呼ばれる燃焼室、その後ろに「一の間、二の間...」または「一房<sup>ふくろ</sup>（袋）、二房<sup>ふくろ</sup>（袋）...」と数えられる横室型（蒲鉾状）の焼成室が数室並び、最後尾に煙室が配置される。焼成室内の狭間穴は「横狭間」構造。構築部材にはオオゲタ・マクラ・クレが使用されている。
- 30) 『耐酸化学陶磁器』 高山耕山化学陶器株式会社 1940年（商品カタログ）
- 31) 機械栓は明治8年（1875）にアメリカで開発され、明治11年（1878）以降に日本においても使用されるようになる。しかし、価格が高い、リユース時に洗浄の手間がかかるという理由から日本では普及に至らなかった。（「ガラス容器の変遷」『日本包装学会誌 vol.21 No.5』 日本包装学会 2012年）
- 32) 江戸時代より続く、京焼の窯元 真葛焼 宮川香齋公式ホームページ「歴史」 2020年5月18日閲覧 <http://www.makuzu-yaki.jp/history/>
- 33) 品川リフラクトリーズ株式会社公式ホームページ「当社の年表」 2020年5月18日閲覧 <https://www.shinagawa.co.jp/profile/chronology.html>
- 34) 註33) に同じ
- 35) 近年まで陶磁器の廃品回収業者がいた。（立命館大学 21世紀COE 京都アート・エンタテインメント創成研究近世京都手工業生産プロジェクト『京焼と登り窯－伝統工芸を支えてきたもの－』2006年）
- 36) 大庭重信・小田木富慈美 他『中之島蔵屋敷跡発掘調査報告Ⅲ』 公益財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所 2018年

## 参考文献

- 岡 佳子『日本のやきもの 窯別ガイド 京都』 淡交社 2003年
- 京都市編『元藤平陶芸登り窯の歴史的価値等調査研究報告書』 2015年
- 黒田和哉『茶碗 窯別銘款』 株式会社グラフィック社 1999年
- 米田浩之・木立雅朗「道仙化学製陶所窯跡 第5次発掘調査成果報告」『立命館文学』627号 2012年
- 『耐酸化学陶磁器』 高山耕山化学陶器株式会社 1940年（商品カタログ）
- 田村喜子『五条坂 陶芸のまち今昔』 新潮社 1988年
- 陶器全集刊行会『日本古陶銘款集 京都・補遺篇』 平安堂書店 1973年
- 中ノ堂一信『京焼 伝統と革新』 淡交社 2018年
- 藤岡幸二編『京焼百年の歩み』 附録『陶磁器説』『陶磁器説図』 財団法人京都陶磁器協会 1962年
- 立命館大学 21世紀COE 京都アート・エンタテインメント創成研究近世京都手工業生産プロジェクト
- 『京焼と登り窯－伝統工芸を支えてきたもの－』 2006年

付表1 土器類観察表

掲載 番号	器種	器形	遺構・層名	法量(cm)			色調	胎土	焼成	残存率 (%)	備考
				口径	底径	高さ					
1	施釉陶器	小椀	新段階:南端拡張区	6.8	3.0	3.8	胎:2.5Y6/1黄灰 釉:N4/0灰	密	良	50	浅見五郎助印
2	施釉陶器	椀	新段階:煙室	—	5.0	(2.1)	胎:10YR7/2にぶい黄橙 釉:10YR6/3にぶい黄橙	密	良	25	永楽善五郎か
3	染付磁器	小椀	新段階:煙室	—	3.8	(2.6)	胎:N9/0白 釉:2.5Y7/1灰白	堅緻	良	20	「平安兼山」
4	染付磁器	小椀	新~中段階:二の間 床面	8.0	2.9	3.8	胎:N8/0灰白 釉:透明	堅緻	良	30	
5	染付磁器	小椀	新~中段階:五の間 床面	—	3.4	(3.5)	胎:N8/0灰白 釉:呉須	密	良	30	「萬珠堂」印
6	施釉陶器	急須蓋	新段階:三の間 隔壁掘形	6.3	—	(3.0)	胎:2.5Y8/2灰白 釉:2.5Y6/6明黄褐	密	良	80	浅見五郎助印
7	染付磁器	小椀蓋	新段階:三の間 床面	8.0	ツマミ部 3.2	2.3	胎:N8/0灰白 釉:呉須	堅緻	良	30	「福」
8	染付磁器	小椀蓋	新段階:三の間 床面	(8.1)	ツマミ部 3.1	2.6	胎:N8/0灰白 釉:呉須	堅緻	良	20	「福」
9	染付磁器	小椀蓋	新段階:三の間 隔壁掘形	10.9	ツマミ部 3.9	2.7	胎:N8/0灰白 釉:呉須	堅緻	良	60	「直陶製也」
10	磁器	小瓶	新段階:三の間 床面	—	(5.3)	(3.7)	胎:N8/0灰白 釉:10GY7/1明緑灰、呉須	堅緻	良	50	「大日本永楽造」
11	染付磁器	小椀	新~中段階:五の間 床面	—	3.6	(4.4)	胎:N8/0灰白 釉:呉須	堅緻	良	30	「福」
12	染付磁器	椀	新段階:三の間 床面	(12.1)	(4.3)	4.9	胎:N8/0灰白 釉:呉須	堅緻	良	50	「福」
13	施釉陶器	灯明皿	新段階:三の間 床面	9.3	4.2	1.7	胎:10YR7/3にぶい黄橙 釉:2.5YR6/3にぶい黄	密	良	100	
14	磁器	仏花器	新段階:土台	—	3.4	(6.8)	胎:N8/0灰白 釉:透明	堅緻	良	70	「幹山精製」
15	施釉陶器	小椀	新段階:土台	—	(4.0)	(3.7)	胎:2.5Y7/3浅黄 釉:2.5Y6/6明黄褐	密	良	40	浅見五郎助印
16	磁器	小椀蓋	中段階:前庭部 埋土	8.3	ツマミ部 3.1	1.9	胎:N8/0灰白 釉:10R4/8赤	堅緻	良	50	「福」
17	施釉陶器	徳利	中段階:前庭部 埋土	3.3	7.6	22.4	胎:N5/0灰、7.5YR4/2灰褐 釉:7.5YR3/1黒褐	密	良	100	
18	染付磁器	仏花器	中段階:土台	—	4.7	(6.1)	胎:N8/0灰白 釉:呉須	堅緻	良	30	「大日本永楽造」
19	染付磁器	椀蓋	中段階:土台	7.6	ツマミ部 3.0	2.5	胎:N8/0灰白 釉:呉須	堅緻	良	30	「福」
20	染付磁器	小椀	中段階:土台	—	3.2	(1.9)	胎:N8/0灰白 釉:呉須	堅緻	良	30	「道八」
21	染付磁器	小椀	中段階:土台	(7.3)	2.7	4.1	胎:N9/0白 釉:N8/0灰白	堅緻	良	50	「鳳瑞精製」
22	染付磁器	小椀	中段階:土台	(8.0)	3.1	5.2	胎:N9/0白 釉:N8/0灰白	堅緻	良	50	「永翁」
23	染付磁器	小椀	中段階:土台	—	2.6	(4.2)	胎:N8/0灰白 釉:呉須	堅緻	良	30	「大日本真葛造」
24	施釉陶器	小椀	中段階:土台	—	4.0	(3.2)	胎:10YR8/2灰白 釉:N8/0灰白	密	良	30	「文斎」印
25	染付磁器	椀	中段階:土台	(6.3)	4.1	6.4	胎:N8/0灰白 釉:呉須	堅緻	良	60	「直陶製也」
26	染付磁器	椀	中段階:土台	—	3.7	(2.7)	胎:N8/0灰白 釉:呉須	堅緻	良	30	
27	染付磁器	椀	中段階:土台	(10.6)	(3.7)	4.9	胎:N9/0白 釉:N8/0灰白	堅緻	良	70	「亀水造」
28	施釉陶器	椀	中段階:土台	—	5.4	(3.7)	胎:10YR7/4にぶい黄橙 釉:N7/0灰白	密	良	30	「晴雲山」印
29	染付磁器	椀	中段階:土台	13.7	6.3	6.2	胎:N8/0灰白 釉:呉須	堅緻	良	80	「乾山」
30	染付磁器	椀蓋	中段階:四の間 床面	—	ツマミ部 3.8	(1.2)	胎:N9/0白 釉:N8/0灰白	堅緻	良	30	「大日本鳳瑞製」
31	染付磁器	小椀	古段階:前庭部 埋土	—	3.0	(2.5)	胎:N9/0白 釉:N8/0灰白	堅緻	良	30	「幹山精製」

掲載 番号	器種	器形	遺構・層名	法量(cm)			色調	胎土	焼成	残存率 (%)	備考
				口径	底径	高さ					
32	磁器	小椀	古段階:前庭部 水溜1	7.0	3.8	5.4	胎:2.5YR8/1灰白 釉:N8/0灰白	堅緻	良	90	浅見五郎助印
33	施釉陶器	椀	古段階:前庭部 埋土	—	6.7	(2.9)	10YR8/4浅黄橙	密	良	30	「永翁」
34	施釉陶器	小椀	古段階:前庭部 埋土	8.8	5.2	3.7	胎:10YR6/3にぶい黄橙 釉:10Y7/1灰白	密	良	100	浅見五郎助印
35	染付磁器	椀	古段階:前庭部 水溜1	11.4	4.3	5.6	胎:N9/0白 釉:N8/0灰白	堅緻	良	50	「大日本翁山造」
36	磁器	瓶	中段階:土台	8.0	—	(9.4)	胎:N8/0灰白 釉:透明釉、 5Y6/3オリーブ黄	堅緻	良	25	
37	磁器	ポット カバー	新段階:前庭部 埋土	幅(20.5)	—	(14.5)	胎:N9/0白 釉:透明	堅緻	良	40	
38	磁器	漏斗か	中段階:土台	—	—	(10.4)	胎:N9/0白 釉:透明	堅緻	良	10	「道仙造」
39	磁器	集酸瓶	中段階:土台	(28.0)	—	13.1	胎:N9/0白 釉:透明	堅緻	良	25	
40	施釉陶器	集酸瓶	中段階:土台	(20.0)	—	(17.5)	胎:2.5Y8/2灰白 釉:5Y6/1灰	密	良	40	
41	磁器	集酸瓶	中段階:土台	体部径 (24.0)	—	(12.5)	胎:N8/0灰白 釉:透明	堅緻	良	25	
42	磁器	集酸瓶	中段階:前庭部 埋土	(22.0)	—	(5.7)	胎:N9/0白 釉:透明	堅緻	良	10	
43	磁器	集酸瓶	新段階:煙室	—	(24.8)	(6.2)	胎:N9/0白 釉:透明	堅緻	良	10	
44	磁器	ポット カバーか	中段階:土台	(44.6)	—	12.5	胎:N9/0白 釉:透明	堅緻	良	30	
45	磁器	集酸瓶	新～中段階:土台	(41.0)	—	(13.5)	胎:N9/0白 釉:透明	堅緻	良	10	
46	磁器	集酸瓶	中段階:土台	—	(25.2)	(30.7)	胎:N8/0灰白 釉:透明	堅緻	良	25	
47	陶器	蛇管	古段階:前庭部 排水設備	5.0	長さ (38.5)	—	2.5Y7/2灰黄	密	良	80	内面に透明釉
48	陶器	蛇管か	新～中段階:土台	径(8.0)	長さ (26.0)	—	10YR7/3にぶい黄橙	密	良	25	
49	磁器	コック	新段階:煙室	径9.0	長さ (13.5)	—	N8/0灰白	堅緻	良	60	
50	磁器	コック	新段階:煙室	径9.0	長さ (12.5)	—	N8/0灰白	堅緻	良	80	
51	磁器	コック	新段階:煙室	径8.8	—	8.0	胎:N9/0白 釉:N8/0灰白	堅緻	良	100	
52	磁器	スプラッ シャーか	中段階:土台	2.0	頭部径 4.0	3.5	胎:N9/0白 釉:白	堅緻	良	100	
53	磁器	ポット カバーか	新段階:前庭部 埋土	6.9	—	2.6	胎:N9/0白 釉:白	堅緻	良	100	
54	磁器	合子蓋	古段階:土台	5.6	—	1.5	胎:N9/0白 釉:白	堅緻	良	90	
55	磁器	合子身	古段階:土台	5.3	5.6	5.8	胎:N9/0白 釉:白	堅緻	良	90	
56	磁器	蓋	中段階:前庭部 埋土	8.1	—	4.8	胎:N9/0白 釉:白	堅緻	良	95	
57	磁器	蒸発皿	新段階:煙室	8.2	4.0	5.9	胎:N9/0白 釉:白、文字:青	堅緻	良	100	「道仙」
58	磁器	乳棒	新段階:煙室	径1.9	—	(6.2)	胎:2.5Y8/1灰白 釉:7.5GY8/1明緑色	堅緻	良	50	
59	磁器	乳棒	中段階:土台	径2.4	—	(6.5)	胎:N8/0灰白 釉:白	堅緻	良	50	
60	磁器	乳棒	中段階:土台	3.2	—	6.0	2.5Y8/1灰白	堅緻	良	90	
61	磁器	蒸発皿	中～古段階:前庭部 埋土	(23.0)	—	(7.0)	胎:N9/0白 釉:白	堅緻	良	40	「道仙造」
62	磁器	蒸発皿	古段階:前庭部 埋土	(29.6)	—	12.0	胎:N9/0白 釉:N8/0灰白	堅緻	良	20	

※( )内の数値は残存値

付表2 その他の製品観察表

掲載 番号	種類	器形	遺構・層名	法量(cm)			色調	胎土	焼成	残存率 (%)	備考
				口径	底径	高さ					
63	土師質 土器	皿	中段階:土台	10.4	3.8	2.8	2.5YR8/1灰白	密	良	100	「小川文斎」刻
64	土師質 土器	皿	中段階:土台	(21.5)	10.2	4.3	2.5Y8/2灰白	密	良	50	「大」線刻
65	磁器	テスト ピース	中段階:前庭部 埋土	長さ3.3	幅1.8	0.6	7.5Y8/1灰白	密	堅緻	100	
66	染付磁器	テスト ピース	中段階:土台	—	—	(3.6)	胎:N8/0灰白 釉:透明	密	良	10	
67	土製品	土型	中段階:土台	8.4	—	3.1	7.5YR7/3にぶい橙	密	良	100	浅見五郎助印
68	施釉陶器	乳棒	新段階:前庭部 埋土	長さ (6.5)	頭部径 5.4	—	10YR7/2にぶい黄橙	密	良	50	
69	土製品	シッタ	新段階:煙室	—	(6.8)	(5.8)	10YR7/2にぶい黄橙	密	良	25	線刻
70	土師質 土器	水簸鉢	新段階:西側ステップ	25.2	18.4	14.5	7.5YR8/4浅黄橙	密	良	80	
71	陶器	スノコカ	中段階:前庭部 埋土	長さ (13.5)	幅(9.0)	厚さ2.5	10YR5/4にぶい黄褐	やや 密	良	50	
72	磁器	基盤	新段階:前庭部 杵材	長さ14.7	幅11.5	厚さ2.3	胎:N9/0白 釉:5Y8/1灰白	堅緻	良	100	
73	磁器	基盤	新段階:前庭部 杵材	長さ23.8	幅16.9	厚さ4.2	胎:N8/0灰白 釉:N8/0灰白	堅緻	良	100	
74	磁器	蓋	中段階:土台	上部径 2.2	下部径 3.0	1.2	10YR7/2にぶい黄橙	堅緻	良	100	
75	磁器	栓	古段階:前庭部 埋土	頭部径 3.0	端部径 1.2	2.7	7.5Y8/1灰白	堅緻	良	100	
76	陶器	栓	中段階:土台	頭部径 4.0	端部径 1.2	3.6	5YR5/2灰褐	密	良	100	
77	磁器	把手	新段階:前庭部 埋土	頭部径 3.0	下部径 1.8	2.0	7.5Y8/1灰白	堅緻	良	100	
78	磁器	把手	新段階:前庭部 埋土	頭部径 3.6	下部径 2.8	2.0	7.5Y8/1灰白	堅緻	良	100	
79	磁器	把手	古段階:前庭部 埋土	径3.5	—	1.9	7.5Y8/1灰白	堅緻	良	100	
80	磁器	把手	古段階:土台	径6.0	—	3.0	7.5Y8/1灰白	堅緻	良	100	
81	磁器	栓	中段階:土台	頭部径 2.5	端部径 0.8	2.5	7.5Y8/1灰白	堅緻	良	100	
82	磁器	栓	古段階:前庭部 埋土	頭部径 2.6	端部径 0.8	3.2	7.5Y8/1灰白	堅緻	良	100	
83	染付磁器	栓	中段階:土台	頭部径 2.7	端部径 1.0	3.3	胎:N9/0白 釉:白	堅緻	良	100	「富久娘」
84	染付磁器	栓	中段階:土台	頭部径 2.7	端部径 1.0	3.3	胎:N9/0白 釉:白	堅緻	良	100	「大塚精醸」
85	土製品	土型	古段階:前庭部 水溜1	長径7.3	短径5.7	厚さ2.3	5YR8/4淡橙	密	良	100	機械栓型(縦)
86	土製品	土型	中段階:前庭部 埋土	長径8.4	短径6.3	厚さ3.9	5YR8/4淡橙	密	良	100	機械栓型(横)

※( )内の数値は残存値

付表3 窯道具類観察表

掲載 番号	種類	器形	遺構・層名	法量(cm)			色調	胎土	焼成	残存率 (%)	備考
				口径	底径	高さ					
87	窯道具	匣鉢	新段階:煙室	12.8	14.8	4.1	10YR8/3浅黄橙	密	良	70	
88	窯道具	匣鉢	中段階:土台	24.8	29.3	7.1	10YR6/3にぶい黄橙	密	良	60	
89	窯道具	匣鉢蓋	古段階:水溜1	径15.4	—	厚さ2.4	2.5Y7/2灰黄 ~10YR5/4にぶい黄褐	密	良	100	
90	窯道具	匣鉢敷	古段階:前庭部 埋土	径15.2	—	厚さ1.7	2.5Y7/2灰白	密	良	100	
91	窯道具	匣鉢敷	中段階:土台	径(11.4)	—	厚さ2.6	7.5YR7/4にぶい橙	密	良	10	
92	窯道具	匣鉢敷	中段階:土台	径(8.4)	—	厚さ3.1	10YR8/2灰白 10YR7/6暗黄褐	密	良	20	
93	窯道具	匣鉢	新段階:煙室	(9.0)	(9.4)	5.1	10YR6/6明黄橙	密	良	40	鉄釉文字
94	窯道具	匣鉢	中段階:前庭部 埋土	9.2	10.3	4.6	10YR8/3浅黄橙	密	良	100	「浅 ヽ」鉄釉文字
95	窯道具	匣鉢	古段階:前庭部 水溜1	10.5	11.4	5.1	5Y8/0灰白	密	良	100	
96	窯道具	匣鉢	古段階:前庭部 埋土	(13.0)	(11.9)	6.4	10YR8/4浅黄橙	密	良	40	「与」鉄釉文字
97	窯道具	匣鉢	新段階:煙室	11.5	11.8	7.6	7.5YR7/3にぶい橙	密	良	100	「花マークか」「□」 鉄釉文字
98	窯道具	匣鉢	新段階:三の間 床面	13.8	15.0	6.0	10YR6/4にぶい黄橙	密	良	80	半孔あり
99	窯道具	匣鉢	新段階:煙室	15.0	17.0	5.7	2.5Y7/2灰黄	密	良	100	
100	窯道具	匣鉢	中段階:前庭部 埋土	(26.0)	(30.0)	(11.0)	10YR7/4にぶい黄橙	密	良	60	
101	窯道具	匣鉢	中段階:土台	—	9.4	5.3	7.5YR8/4浅黄橙	密	良	40	「香齋」印
102	窯道具	匣鉢	新段階:煙室	9.3	9.4	9.6	7.5YR6/6橙	密	良	100	
103	窯道具	匣鉢	古段階:前庭部 水溜1	11.0	12.2	9.9	2.5Y8/2灰白	密	良	100	
104	窯道具	匣鉢	中段階:土台	(21.8)	(26.0)	(16.4)	10YR7/4にぶい黄橙	密	良	40	「㊦」印
105	窯道具	匣鉢	中段階:土台	(22.1)	(25.4)	22.4	2.5Y7/3浅黄	密	良	40	
106	窯道具	匣鉢	古段階:前庭部 埋土	(10.4)	(12.2)	6.6	2.5YR7/3浅黄	密	良	100	半孔あり、 「△<マ」刻
107	窯道具	匣鉢	新段階:三の間 床面	(24.4)	(16.0)	(8.2)	10YR7/3にぶい黄橙	密	良	25	
108	窯道具	匣鉢	中段階:前庭部 埋土	(20.4)	(22.3)	6.8	10YR7/4にぶい黄橙	密	良	25	
109	窯道具	匣鉢	採集品	長さ27.4	幅12.4	5.0	2.5Y8/1灰白	密	良	100	4方向に半孔あり
110	窯道具	匣鉢	新段階:三の間 床面	—	幅28.4	19.2	10YR7/4にぶい黄橙	密	良	50	
111	窯道具	ソク	中段階:土台	径4.6	—	7.3	10YR7/4にぶい黄橙	密	良	100	「コ」鉄釉文字
112	窯道具	ソク	新段階:煙室	径6.8	—	5.9	N5/0灰 10YR3/3暗褐	密	良	100	
113	窯道具	ソク	中段階:土台	径7.2	—	(21.5)	10YR5/4にぶい黄褐	密	良	60	
114	窯道具	ソク	古段階:前庭部 埋土	径5.2	—	10.4	7.5YR7/4にぶい橙	密	良	100	「㊦」印
115	窯道具	ソク	採集品	径5.0	—	12.5	7.5YR4/4褐	密	良	100	「㊦ ㊦」印



掲載 番号	種類	器形	遺構・層名	法量(cm)			色調	胎土	焼成	残存率 (%)	備考
				口径	底径	高さ					
116	窯道具	ツク	古段階:前庭部 埋土	径5.4	—	14.0	10YR5/6黄褐	密	良	100	「信治」印
117	窯道具	棚板	新段階:三の間 床面	長さ (16.2)	幅26.5	厚さ3.0	2.5YR4/3にぶい赤褐	密	良	40	
118	窯道具	棚板	新段階:三の間 床面	長さ (25.8)	幅28.6	厚さ3.1	5YR3/3暗赤褐	密	良	60	
119	窯道具	棚板	新段階:煙室 埋土	長さ (23.8)	幅22.5	厚さ3.5	2.5Y7/2灰黄	密	良	60	
120	窯道具	ハマ	中段階:前庭部 埋土	径3.8	—	厚さ0.3	7.5Y8/1灰白	密	良	100	
121	窯道具	ハマ	新段階:五の間 床面	径6.2	—	厚さ 0.2~0.9	10YR7/3にぶい黄橙	密	良	100	
122	窯道具	ハマ	古段階:前庭部 埋土	径6.8	—	厚さ0.4	7.5Y8/1灰白	密	良	100	
123	窯道具	ハマ	新段階:五の間 基底部掘形	径7.5	—	厚さ0.3	5YR7/6橙	密	良	100	
124	窯道具	ハマ	新段階:五の間 床面	径5.3	—	厚さ2.0	5Y8/1灰白	密	やや 軟質	100	
125	窯道具	ハマ	中段階:土台	径9.3	—	厚さ1.0	7.5YR3/4暗褐	密	良	100	
126	窯道具	ハマ	新段階:胴木間 埋土	径4.6	—	厚さ0.7	2.5Y8/1灰白	密	良	100	ピン付き
127	窯道具	ハマ	新段階:前庭部 埋土	径6.0	—	厚さ0.8	2.5YR6/6橙	密	良	100	ピン痕あり
128	窯道具	ハマ	新段階:三の間 床面	長さ7.1	幅7.1	厚さ1.3	5YR5/3にぶい赤褐	密	良	100	
129	窯道具	ハマ	新段階:三の間 床面	長さ11.0	幅8.5	厚さ1.0	10YR6/3にぶい黄橙	密	良	100	「永翁」印
130	窯道具	ハマ	新段階:三の間 基底部掘形	径4.6	—	0.4	7.5YR8/1灰白	密	良	100	
131	窯道具	ハマ	中段階:五の間 床面	径7.5	—	0.6	7.5YR8/1灰白	密	良	100	
132	窯道具	ハマ	中段階:土台	径10	—	0.6	7.5Y8/1灰白	密	良	100	
133	窯道具	ハマ	新段階:胴木間 埋土	径6.3	—	0.5	10YR7/6明黄褐	密	良	100	
134	窯道具	チャツ	新段階:煙室	径16.1	—	2.1	10YR8/1灰白	密	良	100	
135	窯道具	ハマ	新段階:煙室	径6.4	—	1.1	7.5Y8/1灰白	密	良	100	
136	窯道具	ハマ	中段階:五の間 床面	径10.0	—	1.7	7.5YR8/1灰白	密	良	100	
137	窯道具	チャツ	古段階:前庭部 埋土	上部径 8.8	底部径 5.4	3.9	7.5YR8/2灰白	密	良	100	
138	窯道具	チャツ	中段階:土台	上部径 14.8	底部8.0	4.4	N9/0白	密	良	50	
139	窯道具	チャツ	新段階:煙室	上部径 6.2	下部径 2.4	1.6	7.5Y8/1灰白	密	良	100	
140	窯道具	チャツ	新段階:新庭部 埋土	上部径 5.6	下部径 3.4	2.8	7.5YR7/6橙	密	良	100	
141	窯道具	輪トチン	古段階:前庭部 埋土	長径5.4	短径3.7	厚さ0.5	10YR7/2にぶい黄橙	密	良	100	
142	窯道具	輪トチン	新段階:四の間 床面	長径5.7	短径3.7	厚さ1.0	10YR8/2灰白	密	良	100	
143	窯道具	輪トチン	新段階:前庭部 埋土	径2.6	—	厚さ1.0	7.5YR6/6橙	密	良	100	
144	窯道具	輪トチン	新段階:三の間 床面	長径3.5	短径3.2	厚さ1.7	7.5YR8/4浅黄橙	密	良	100	

掲載番号	種類	器形	遺構・層名	法量(cm)			色調	胎土	焼成	残存率(%)	備考
				口径	底径	高さ					
145	窯道具	輪トチン	新段階:四の間 床面	径4.9	—	厚さ1.0	7.5YR7/4にぶい橙	密	良	100	
146	窯道具	輪トチン	中段階:前庭部 埋土	径7.4	—	厚さ0.8	10YR7/1灰白	密	良	100	ピン付き
147	窯道具	輪トチン	古段階:前庭部 埋土	径10.1	—	厚さ1.1	2.5YR6/2灰黄	密	良	100	
148	窯道具	輪トチン	新段階:前庭部 埋土	径10.1	—	厚さ3.0	10YR7/2にぶい黄橙	密	良	100	
149	窯道具	輪トチン	古段階:前庭部 土坑3	—	—	2.2	7.5YR6/4にぶい橙	密	良	50	
150	窯道具	輪トチン	新段階:煙室	—	—	2.9	7.5YR6/4にぶい橙	密	良	40	
151	窯道具	ハマ	中段階:四の間 床面	—	—	3.0	7.5YR7/6橙	密	良	40	
152	窯道具	トチン	中段階:五の間 床面	径22.5	—	2.2	N9/0白	密	良	100	

※( )内の数値は残存値

付表4 耐火煉瓦観察表

掲載番号	種類	器形	遺構・層名	法量(cm)	色調	胎土	焼成	残存率(%)	備考
153	耐火煉瓦	クレ	新段階:煙室	径11.2、長さ17.2	7.5YR7/6橙～ 7.5YR4/2灰褐	密	良	100	
154	耐火煉瓦	クレ	中段階:土台	径11.4、長さ18.5	5YR7/6橙～5YR4/1褐灰	密	良	100	
155	耐火煉瓦	クレ	古段階:前庭部 水溜2	径10.0、長さ(20.4)	5YR7/6橙～ 7.5YR3/3暗褐	密	良	80	
156	耐火煉瓦	色見煉瓦	古段階:前庭部 埋土	径11.0、長さ11.0	7.5YR8/4浅黄橙～ 7.5YR3/3暗褐	密	良	70	
157	耐火煉瓦	色見煉瓦	採集品	径12.4、長さ10.5	7.5YR7/4にぶい橙～ 7.5YR6/2灰褐	密	良	100	
158	耐火煉瓦	並形煉瓦	新段階:一の間	22.8×11.4×6.5	2.5Y8/4淡黄	密	良	100	「KS KAWARO MITSUIISHI」印
159	耐火煉瓦	穴明き煉瓦	新段階:煙室	22.0×10.0×6.0	2.5Y3/4暗赤褐	密	良	100	
160	耐火煉瓦	アーチ煉瓦	新段階:煙室	11.0×25.0×8.5	5YR6/8橙	密	良	100	
161	耐火煉瓦	マクラ	新段階:桐木間	24.0×24.0×6.0	5YR4/8橙	密	良	100	
162	耐火煉瓦	マクラ	採集品	24.0×(19.0)×10.0	5YR6/8橙	密	良	80	入江道仙印か
163	耐火煉瓦	オオゲタ	新段階:桐木間	22.0×40.0×22.0	10YR7/8黄橙	密	良	100	「MKK SK32」印

※( )内の数値は残存値

# 圖 版



Y=-20.628



Y=-20.624

Y=-20.620



X=-111.428

X=-111.432

X=-111.436

X=-111.440

0 3m

新段階：平面オルソ画像（1：80）

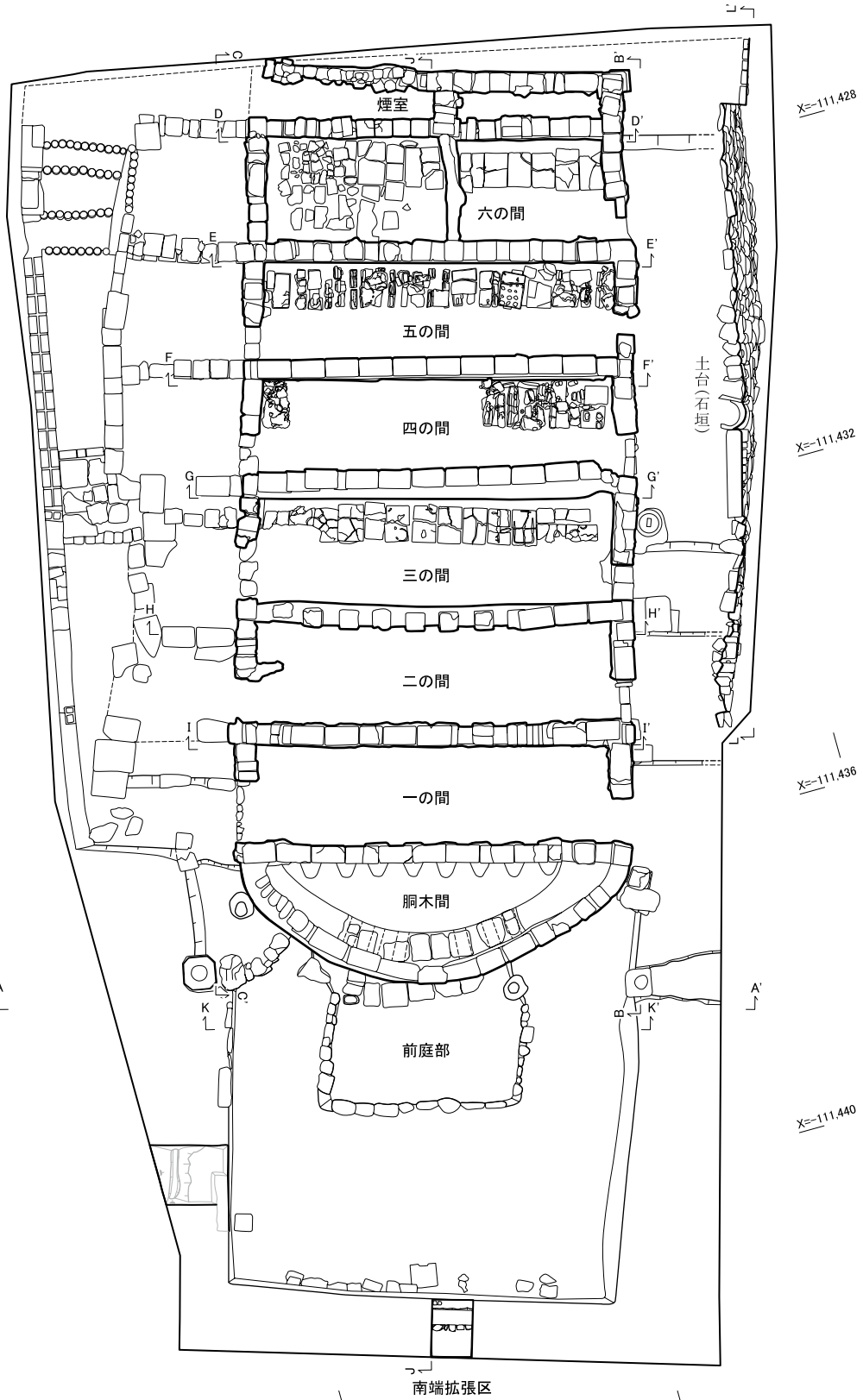
図版2  
遺構

Y=-20.628



Y=-20.624

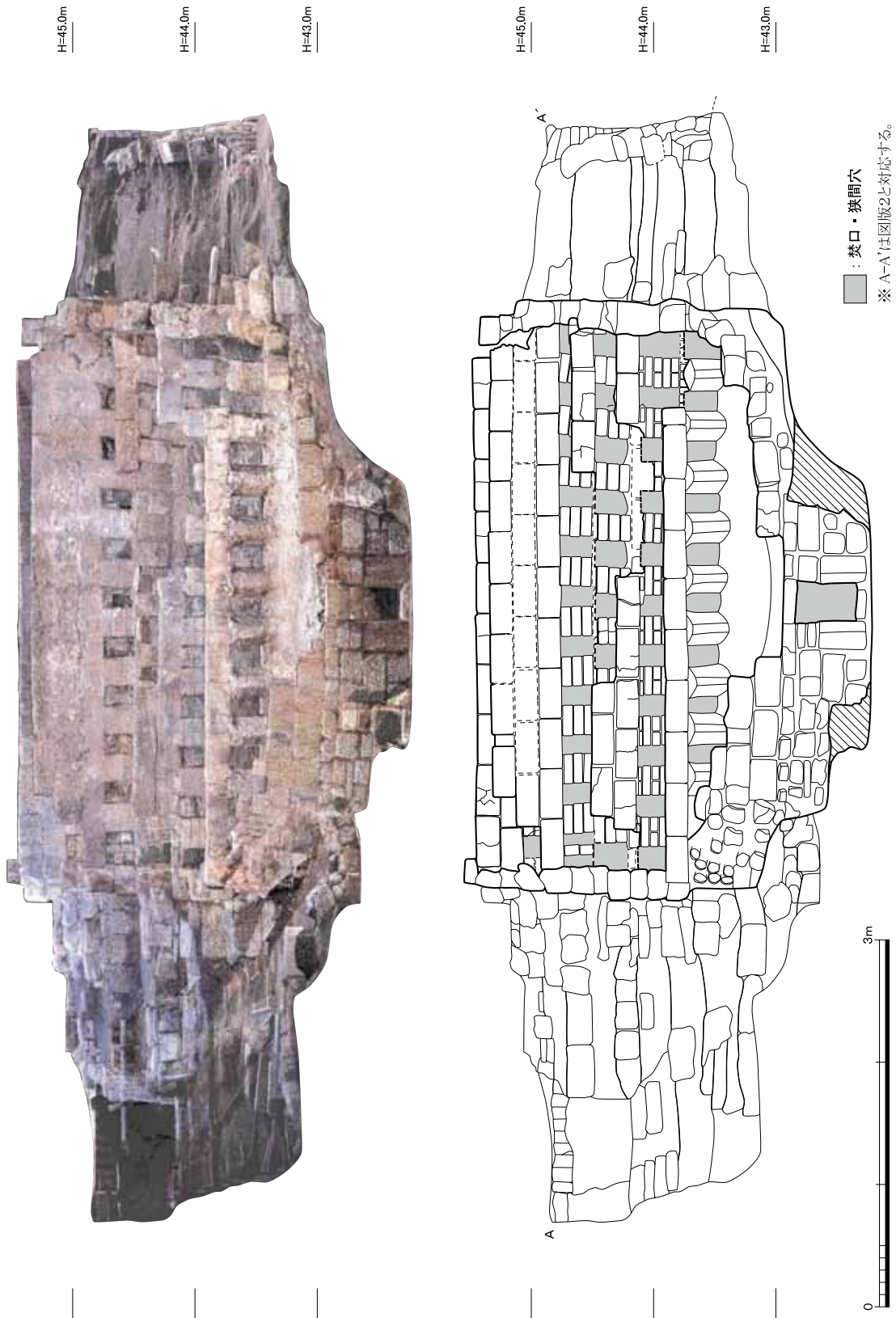
Y=-20.620



※ A-A'は図版3、B-B'・C-C'は図版4、D-D'～I-I'は図版5、J-J'は図版6、  
K-K'は図8、L-L'は図版7と対応する。



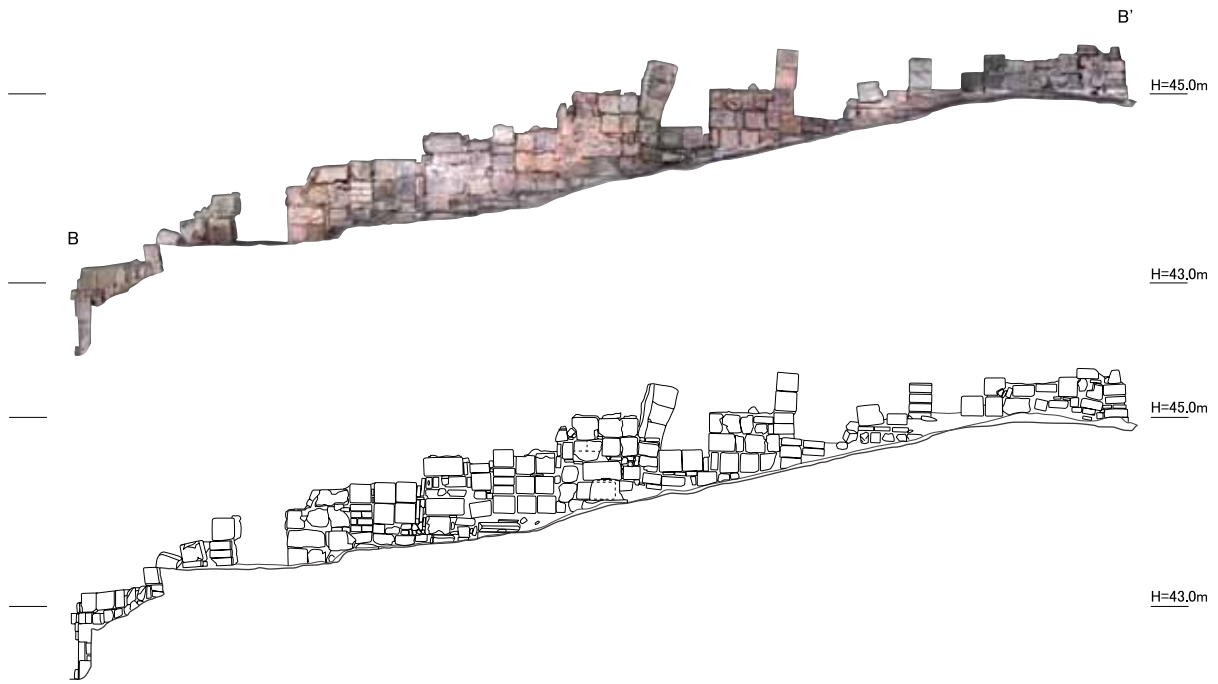
新段階：平面図（1：80）



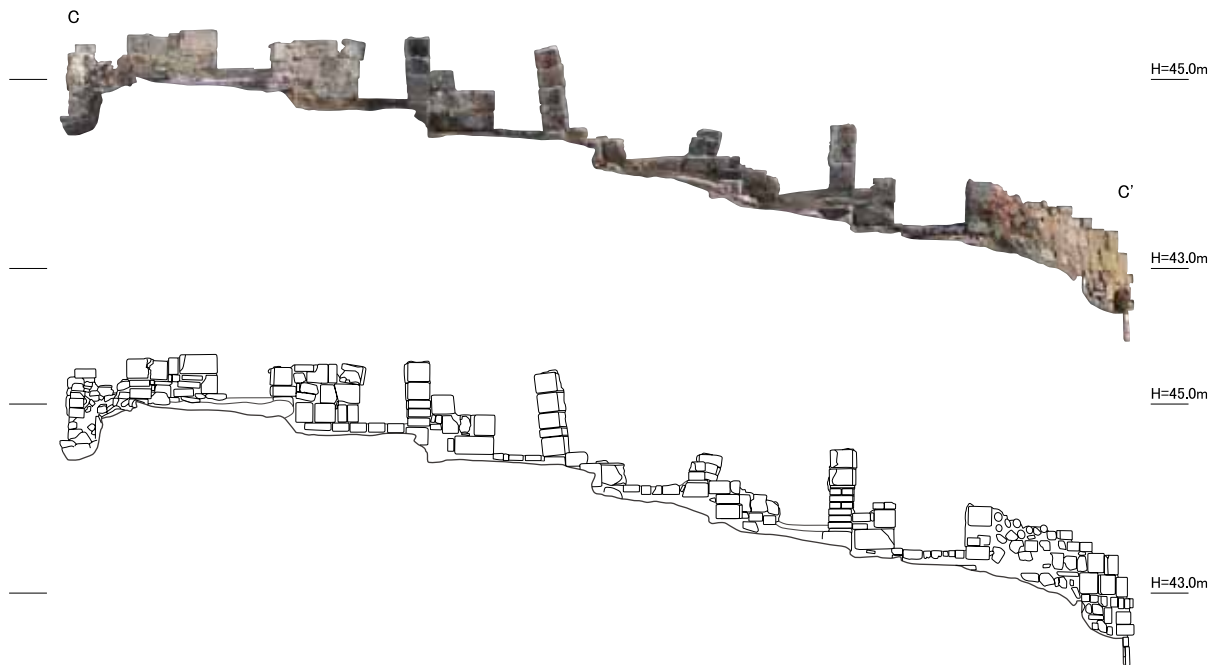
新段階：前庭部立面図・オルソ画像（1：50）

図版  
4  
遺構

窯東壁



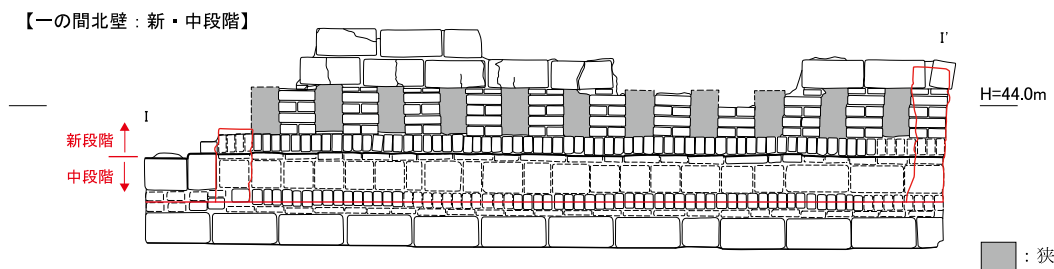
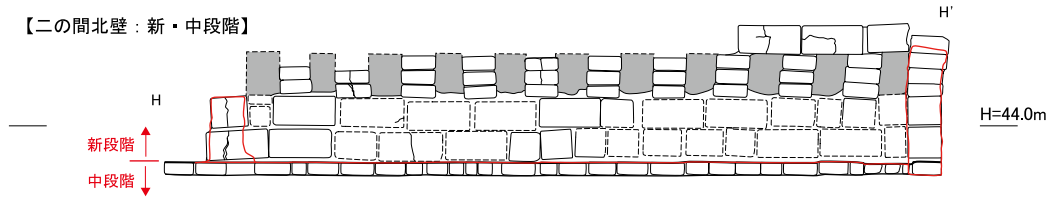
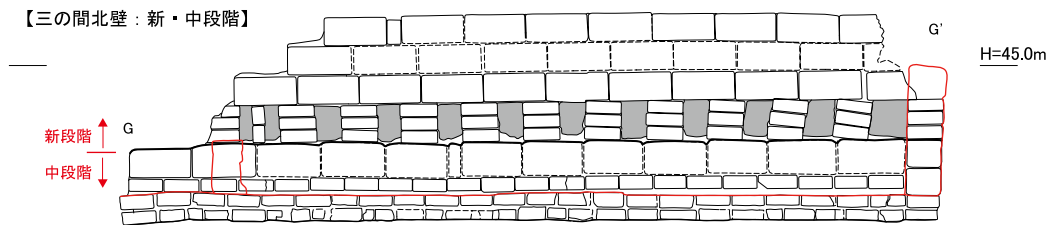
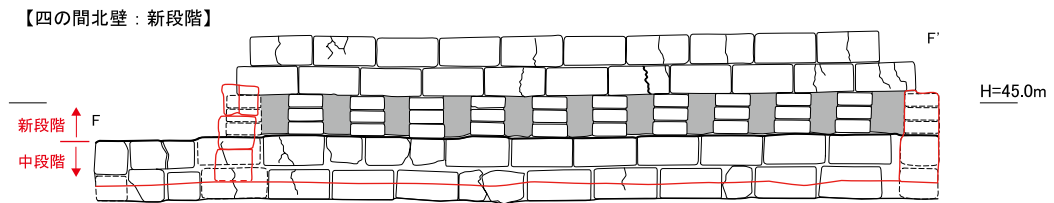
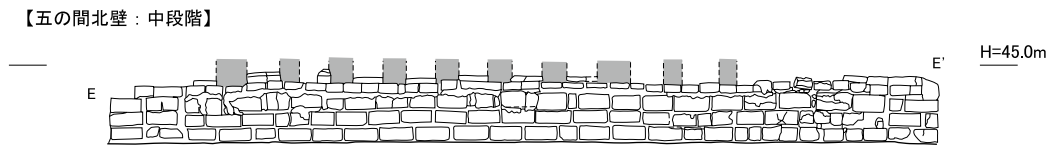
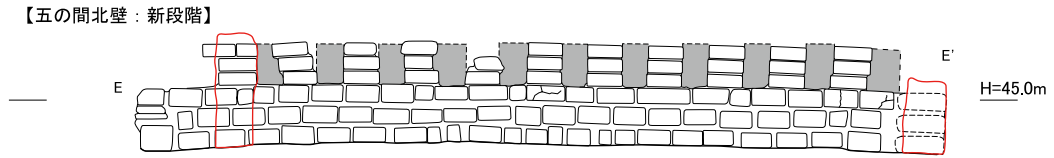
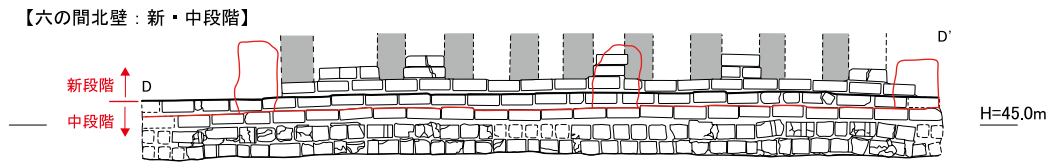
窯西壁



※ B-B'、C-C'は図版2と対応する。







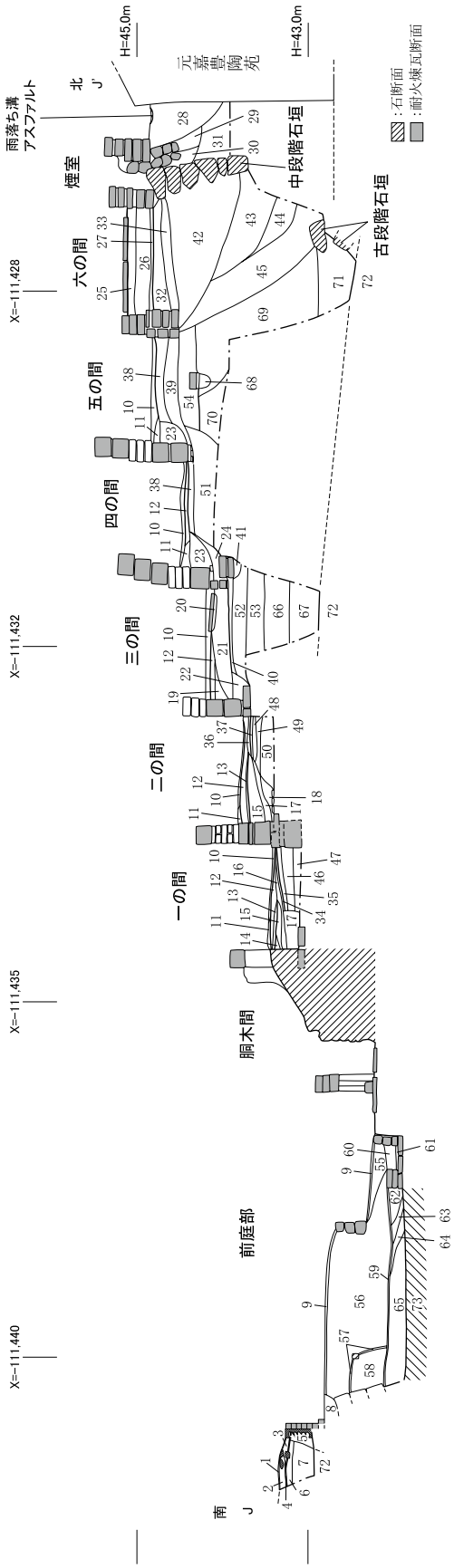
■：狭間穴

※ D-D'～I-I'は図版2と対応する。  
 ※ 赤線は新段階の側壁と床面を示す。



新・中段階：焼成室北壁立面図（1：50）

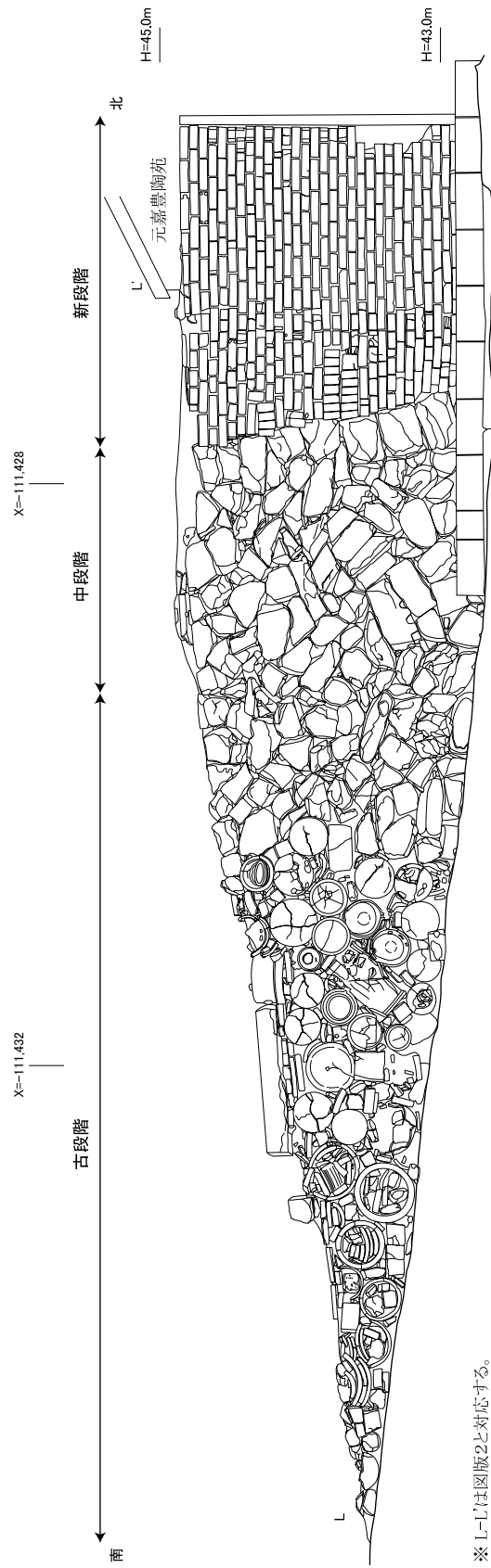
図版6 遺構



築断面図 (1 : 80)

- |  |   |  |
|--|---|--|
| <p>1 10YR5/2灰黄褐色 微砂 よく締まる 陶磁器・窯道具少量含む</p> <p>2 5Y7/2灰白色 微砂 陶磁器・窯道具多量含む</p> <p>3 10YR4/2灰黄褐色 微砂 φ5mm程の礫含む</p> <p>4 10YR3/1黒褐色 微砂 よく締まる</p> <p>5 5Y5/1灰色 微砂 やや粘質(捨てコンクリート掘形)</p> <p>6 10YR6/8明黄褐色 細砂 やや粘質(捨てコンクリート掘形)</p> <p>7 10YR3/1黒褐色 微砂 少量の礫含む</p> <p>8 10YR4/1褐灰色 微砂 土器片少量含む</p> <p>9 10YR3/1黒褐色 微砂 よく締まる(新段階前庭部作業面)</p> <p>10 10YR6/2灰黄褐色 微砂 細砂</p> <p>11 自然粘固まり</p> <p>12 10YR5/4にぶい黄褐色 微砂 締め強い、素焼片含む</p> <p>(新段階床面①:一~五の間)</p> <p>13 10YR6/3にぶい黄褐色 微砂 やや締まる</p> <p>14 7.5YR8/1灰白色 微砂(はなれ砂)</p> <p>15 10YR5/2灰黄褐色 微砂 やや締まる 素焼片含む</p> <p>(新段階床面②:一~二の間)</p> <p>16 10YR5/4にぶい黄褐色 微砂 窯道具片・陶器片・炭やや含む</p> <p>17 5YR5/6明赤褐色 微砂(新段階階壁の掘形)</p> <p>18 5YR5/8明赤褐色 微砂 窯道具片・陶器片多量含む(新段階階壁の掘形)</p> <p>19 10YR4/2灰黄褐色 微砂</p> <p>20 輪っちゃん片多量(棚板の緩衝材)</p> <p>21 2.5YR5/8明赤褐色 微砂 焼土</p> <p>22 10YR5/2灰黄褐色 微砂(新段階階壁の掘形)</p> <p>23 10YR5/3にぶい黄褐色 微砂(新段階階壁の掘形)</p> <p>24 10YR6/3にぶい黄褐色 微砂 細砂</p> <p>25 10YR5/6黄褐色 細砂 よく締まる(新段階床面①:六の間)</p> <p>26 5YR6/6橙色 粗砂 陶磁器片・窯道具片・煉瓦多量含む</p> <p>27 5YR4/6赤褐色 粗砂(焼土)</p> | <p>28 10YR3/1黒褐色 微砂 粘性强い</p> <p>29 5Y8/4淡黄色 粘土(窯粘土)ブロック混じる</p> <p>30 10YR2/1黒色 灰・炭混じる</p> <p>31 10YR2/1黒色 微砂 煉瓦片多量含む</p> <p>32 10YR8/1灰白色 粗石 陶磁片多量含む</p> <p>33 10YR8/6明黄褐色 微砂(焼土)</p> <p>34 10YR6/6赤褐色 粗砂(焼土)</p> <p>35 7.5YR8/1灰白色 微砂 細砂(はなれ砂・中段階床面:一の間の)</p> <p>36 5YR5/8明赤褐色 微砂 細砂 やや締まる(焼土)</p> <p>37 7.5YR8/1灰白色 微砂 細砂 やや締まる(はなれ砂・中段階床面:二の間の)</p> <p>38 5YR5/6明赤褐色 粗砂 陶磁器片・窯道具片・煉瓦多量含む</p> <p>(焼土・中段階床面:四・五の間)</p> <p>39 5YR6/6橙色 粗砂 陶磁器片・窯道具片・煉瓦多量含む(焼土)</p> <p>40 2.5YR4/5赤褐色 細砂(焼土・中段階床面:三の間の)</p> <p>41 5YR4/6赤褐色 粗砂(中段階基底部掘形)</p> <p>42 10YR6/1褐灰色 粗砂 陶磁器片・窯道具片・煉瓦多量含む</p> <p>43 5YR4/2灰褐色 微砂 陶磁器片・窯道具片・煉瓦多量含む</p> <p>44 5YR4/4にぶい赤褐色 微砂 陶磁器片・窯道具片・煉瓦多量含む</p> <p>45 10YR4/1褐灰色 微砂 陶磁器片・窯道具片・煉瓦多量含む</p> <p>46 7.5YR5/6明褐色 粗砂 窯道具片・陶器片多量含む(焼土)</p> <p>47 5YR6/6橙色 粗砂 窯道具片・陶器片多量含む</p> <p>48 2.5YR4/4にぶい赤褐色 細砂 やや締まる(焼土)</p> <p>49 5YR6/8橙色 細砂 礫・陶器片少量含む(焼土)</p> <p>50 5YR6/6橙色 粗砂 窯道具片・陶器片多量含む</p> <p>51 7.5YR6/8橙色 粗砂 陶磁器片・窯道具片・煉瓦少量含む</p> <p>52 5YR4/6赤褐色 粗砂 窯道具・陶磁器多量含む</p> <p>53 10YR6/3にぶい黄褐色 細砂 陶磁器片・窯道具片・煉瓦多量含む</p> <p>54 7.5YR7/6橙色 粗砂 陶磁器片・窯道具片・煉瓦多量含む</p> | <p>55 10YR5/2灰黄褐色 細砂~粗砂</p> <p>56 5YR6/6橙色 粗砂 陶磁器片・窯道具片・煉瓦多量含む</p> <p>57 10YR3/1黒褐色 微砂 よく締まる(古段階前庭部作業面)</p> <p>58 10YR3/1黒褐色 粗砂 窯道具・煉瓦片多量含む</p> <p>59 10YR3/3暗褐色 微砂 よく締まる(古段階前庭部作業面)</p> <p>60 7.5YR7/8黄褐色 細砂~粗砂 粘性强い</p> <p>61 10YR2/1黒色 灰</p> <p>62 10YR6/3にぶい黄褐色 細砂 粘性强い</p> <p>63 10YR2/1黒色 炭</p> <p>64 5YR6/6橙色 粗砂 陶磁器片・窯道具片・煉瓦少量含む</p> <p>65 10YR3/1黒褐色 細砂~粗砂 やや粘性有り</p> <p>陶磁器片・窯道具片・煉瓦少量含む</p> <p>66 10YR4/4褐色 細砂 やや締まる</p> <p>67 10YR3/4暗褐色 細砂 陶磁器片・窯道具片・煉瓦中量含む 粘質</p> <p>(古段階土台)</p> <p>68 5YR7/8橙色 粗砂</p> <p>69 5YR8/4淡褐色 粗砂 陶磁器片・窯道具片・煉瓦少量含む</p> <p>70 10YR4/2灰黄褐色 微砂 陶磁器片・窯道具片・煉瓦中量含む</p> <p>71 5YR4/3にぶい赤褐色 細砂 陶磁器片・窯道具片・煉瓦中量含む</p> <p>72 10YR3/2黒褐色 微砂~細砂 粘性やや有り 灰少量含む</p> <p>(古段階築成立面)</p> <p>73 10YR3/1黒褐色 シルト 粘性强い(地山)</p> |
|--|---|--|

※ J-1は図版2と対応する。



東側土台(石垣)立断面図・オルソ画像(1:50)

図版 8  
遺構

Y=-20.628



Y=-20.624

Y=-20.620



X=-111.428

X=-111.432

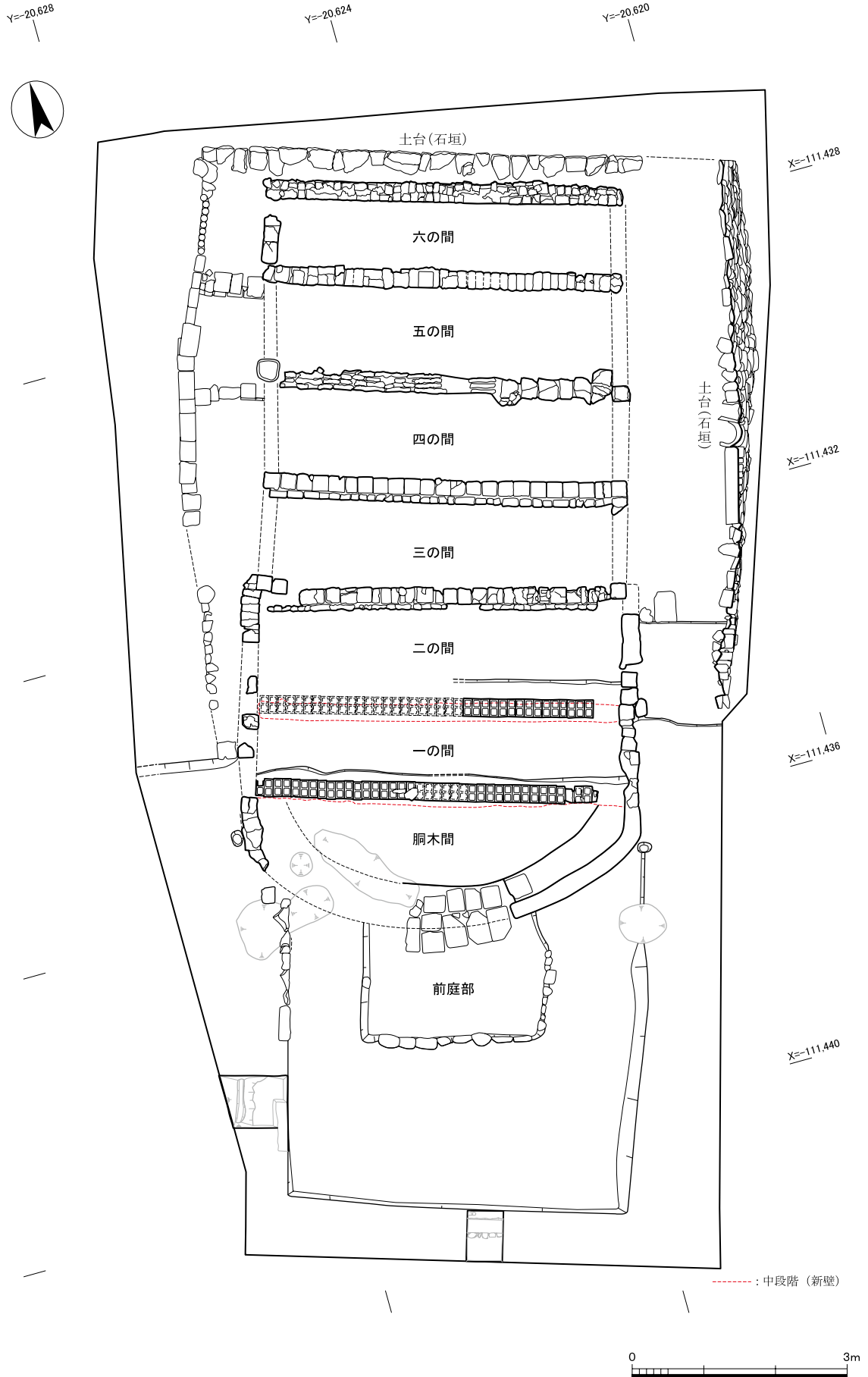
X=-111.436

X=-111.440



中・古段階：平面オルソ画像（1：80）





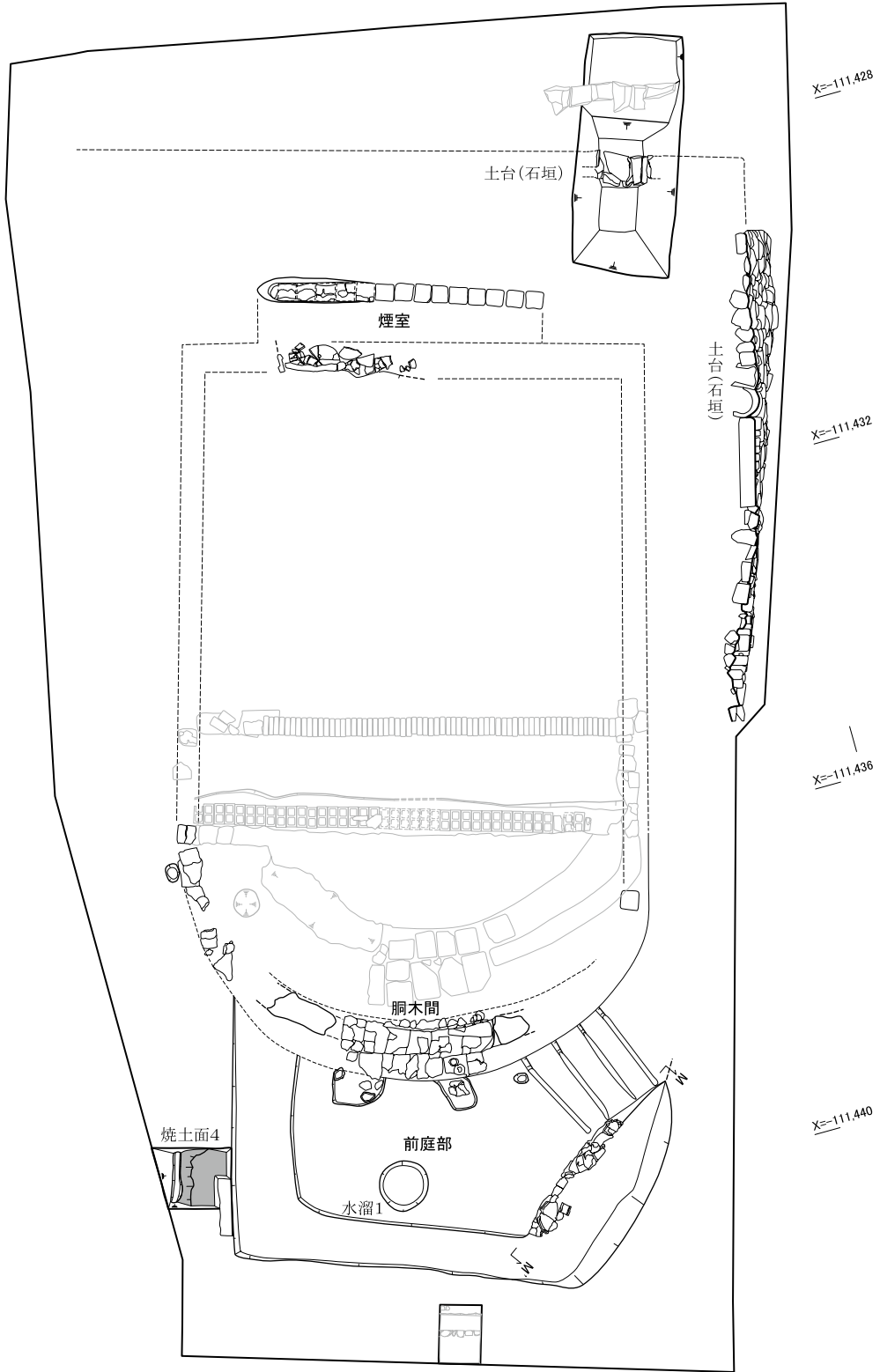
中段階：平面図（1：80）

Y=-20.628



Y=-20.624

Y=-20.620

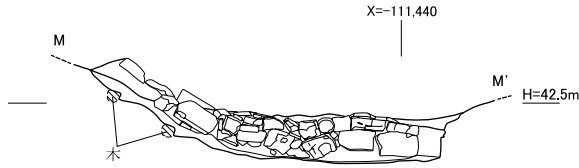


※ M-M'は図版11と対応する。

古段階：平面図（1：80）

0 3m

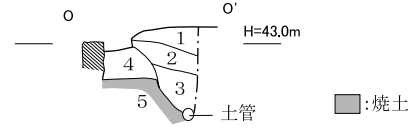
古段階：前庭部南東中段立面図



※ M-M'は図版10と対応する。



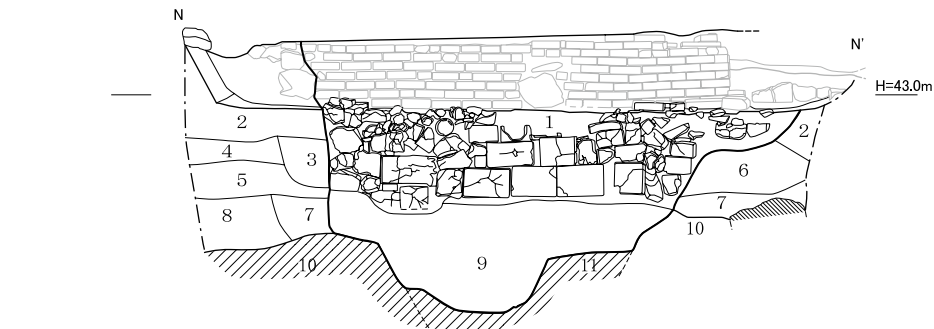
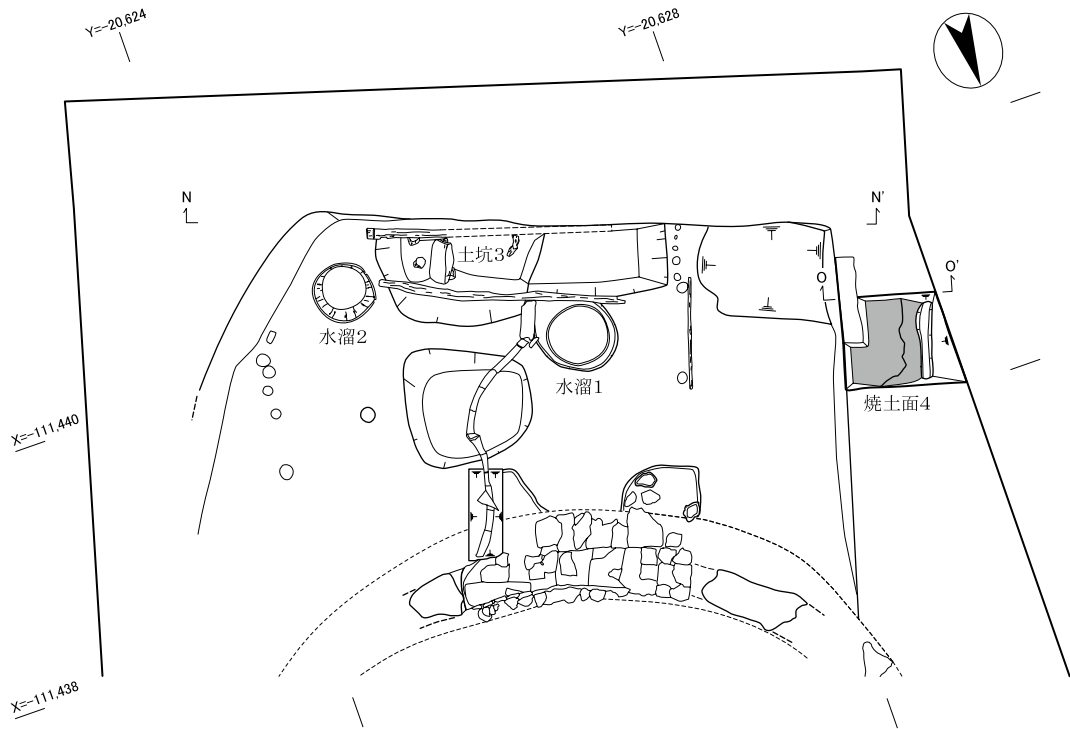
焼土面4



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 炭少量含む
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色 微砂+2.5Y5/4黄褐色ブロック やや粘質 焼土か
- 3 10YR3/3暗褐色 細砂
- 4 7.5YR4/4褐色 細砂 土器片少量含む +5YR3/6暗赤褐色ブロック
- 5 10YR6/6~7/6明黄褐色 固く締まる(焼土・窯体か)



古段階：前庭部排水設備



- |  |   |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1 10YR3/1黒褐色 細砂 やや粘性あり 陶磁器片・窯道具片・煉瓦を多量に含む(石垣の掘形)</li> <li>2 10YR5/2灰黄褐色 微砂~細砂 やや粘質</li> <li>3 10YR3/3暗褐色 細砂・10YR5/8黄褐色 微砂ブロック含む</li> <li>4 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 炭が混じる</li> <li>5 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 粘性強い</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>6 10YR4/2灰黄褐色 細砂 やや粘性あり</li> <li>7 2.5Y3/2黒褐色 細砂 φ3mm程度の礫混じる 粘性強い</li> <li>8 2.5Y3/2黒褐色 細砂・10YR3/1黒褐色 地山ブロック含む</li> <li>9 5YR6/6橙色 粗砂 陶磁器片・窯道具片・煉瓦多量含む(土坑3)</li> <li>10 10YR2/2黒褐色 シルト 粘性強い(地山)</li> <li>11 2.5Y7/6明黄褐色 細砂 粘性強い(地山)</li> </ol> |
|--|---|

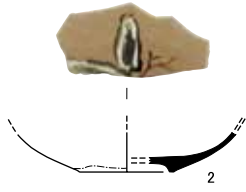


古段階：前庭部実測図 (1 : 50、1 : 60)

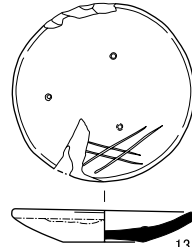
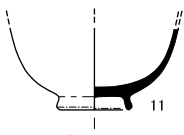
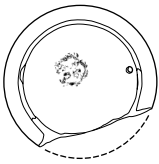
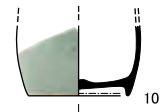
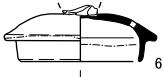
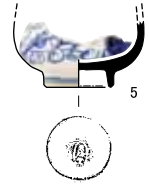
新段階：南端拡張区



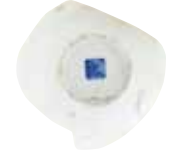
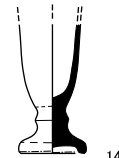
新段階：煙室



新段階：焼成室床面



新段階：土台



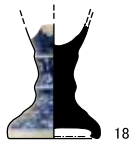
中段階：前庭部



土器類実測図1 (1 : 4)



中段階：土台



18



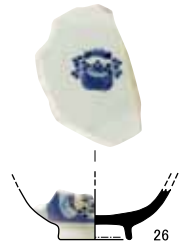
20



22



23



26



19



21



24



25



中段階：焼成室床面



27



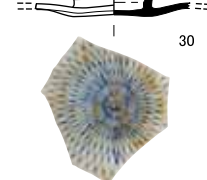
28



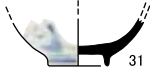
29



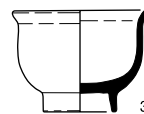
30



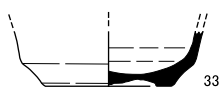
古段階：前庭部



31



32



33



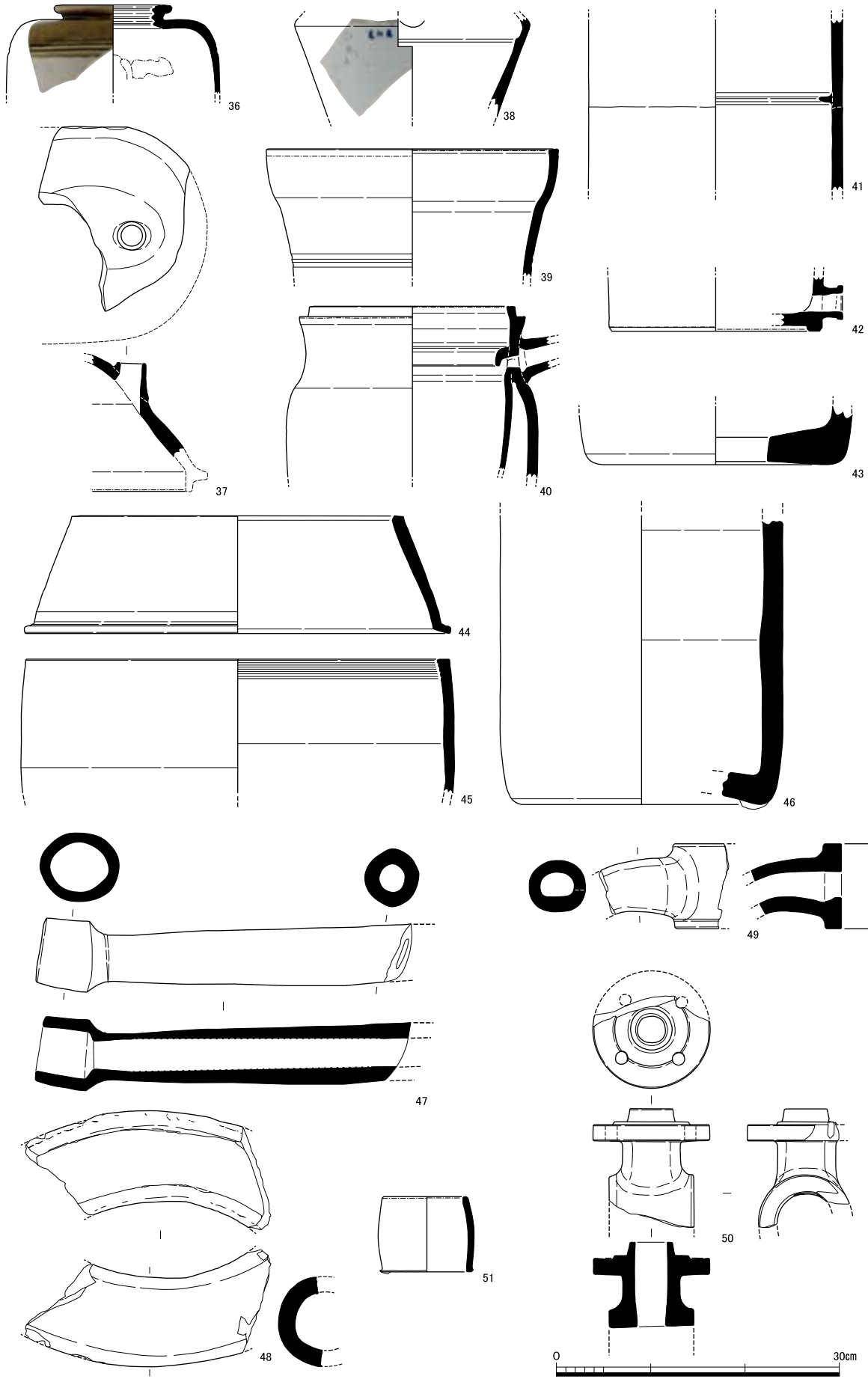
34



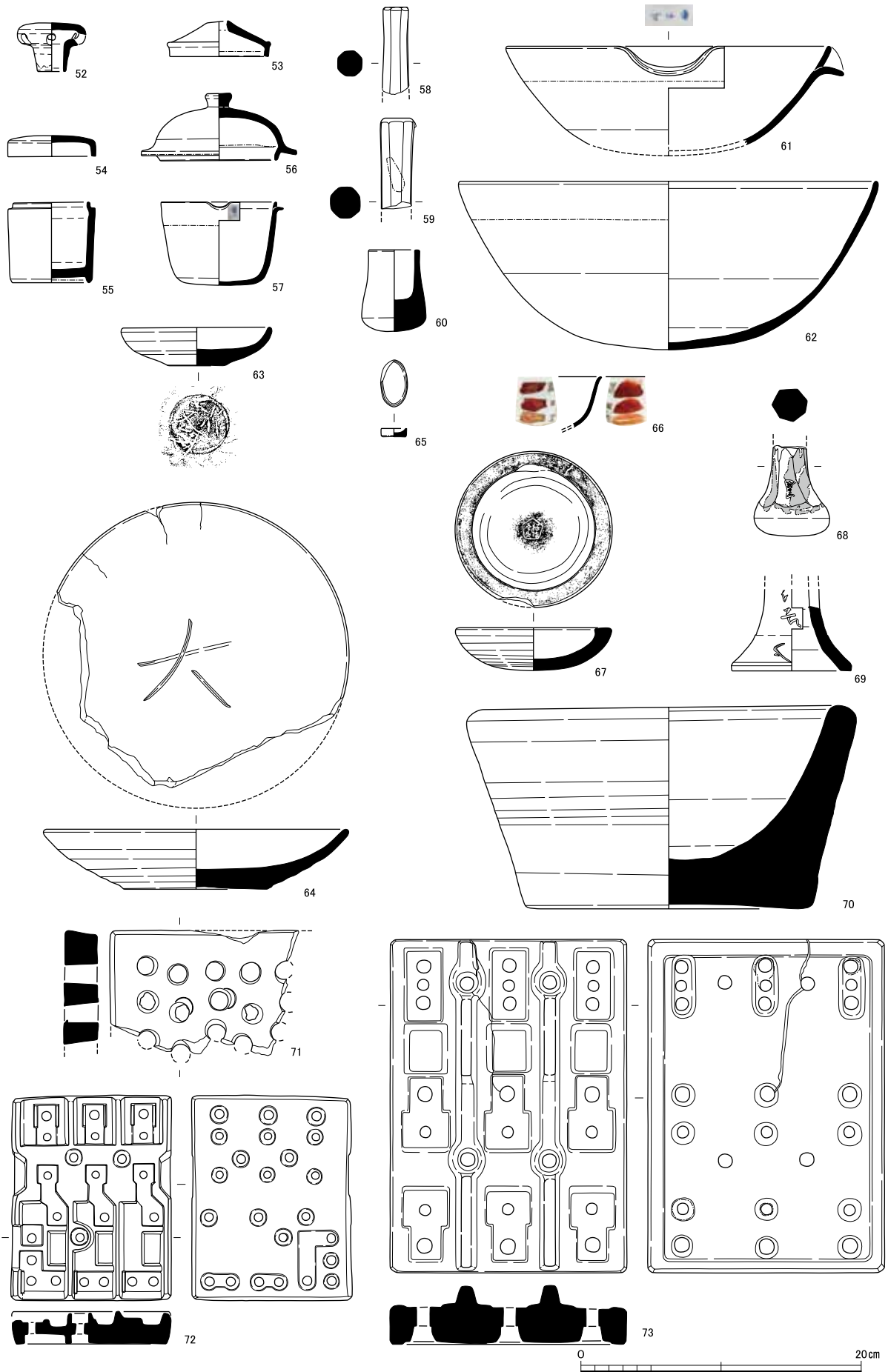
35



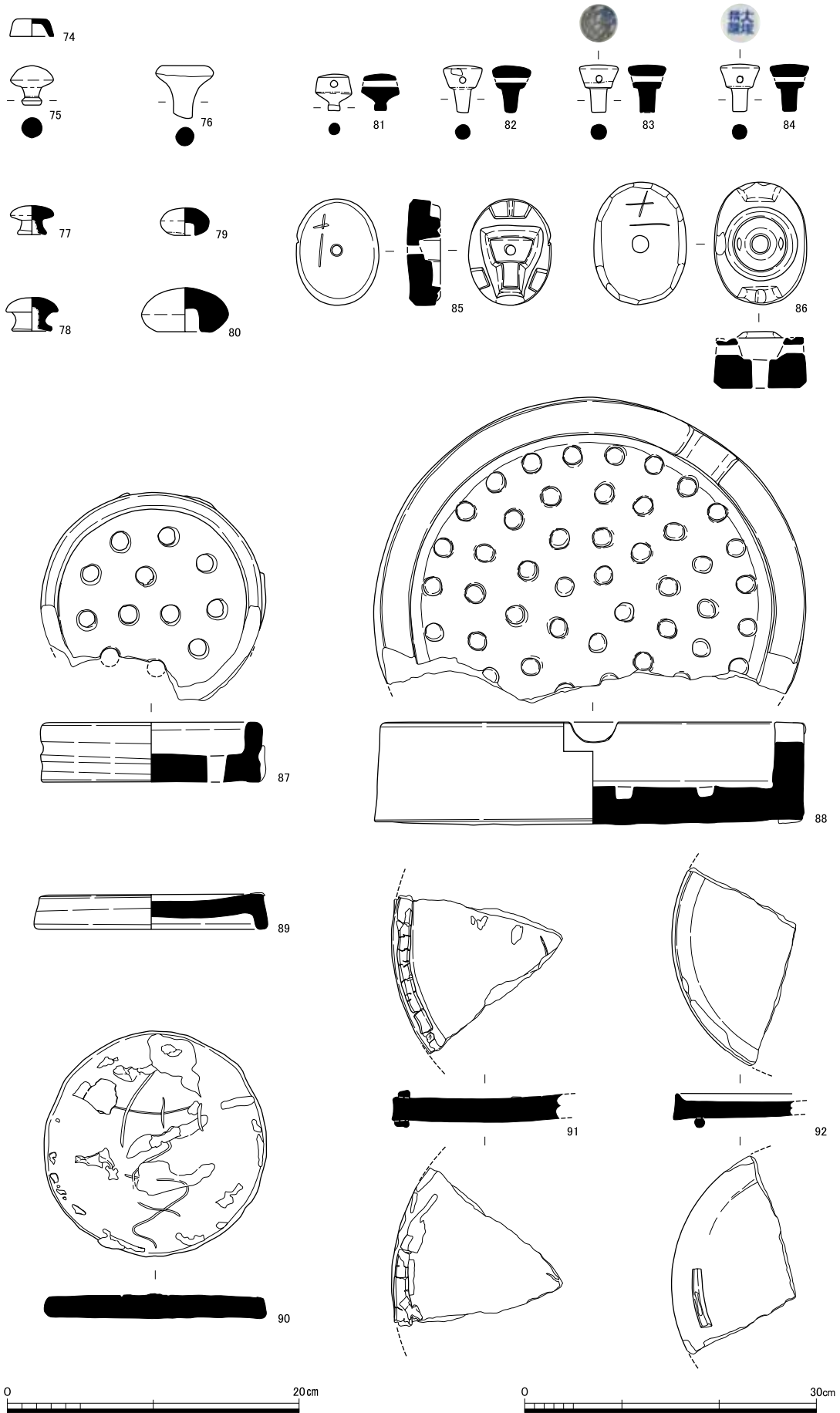
土器類実測図2 (1:4)



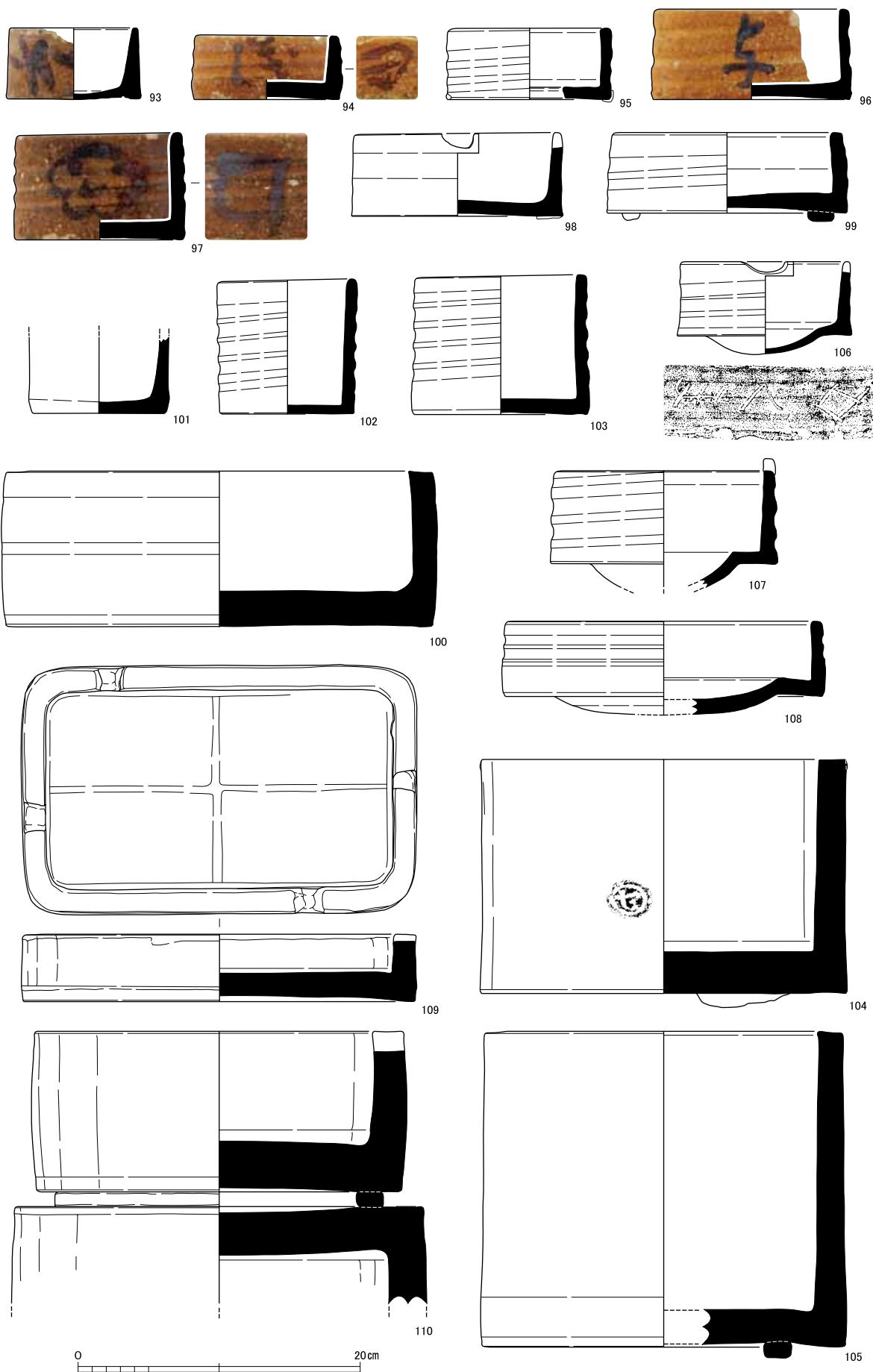
理化学陶磁器实测图1 (1:6)



理化学陶磁器実測図2、その他の製品実測図1 (1:4)

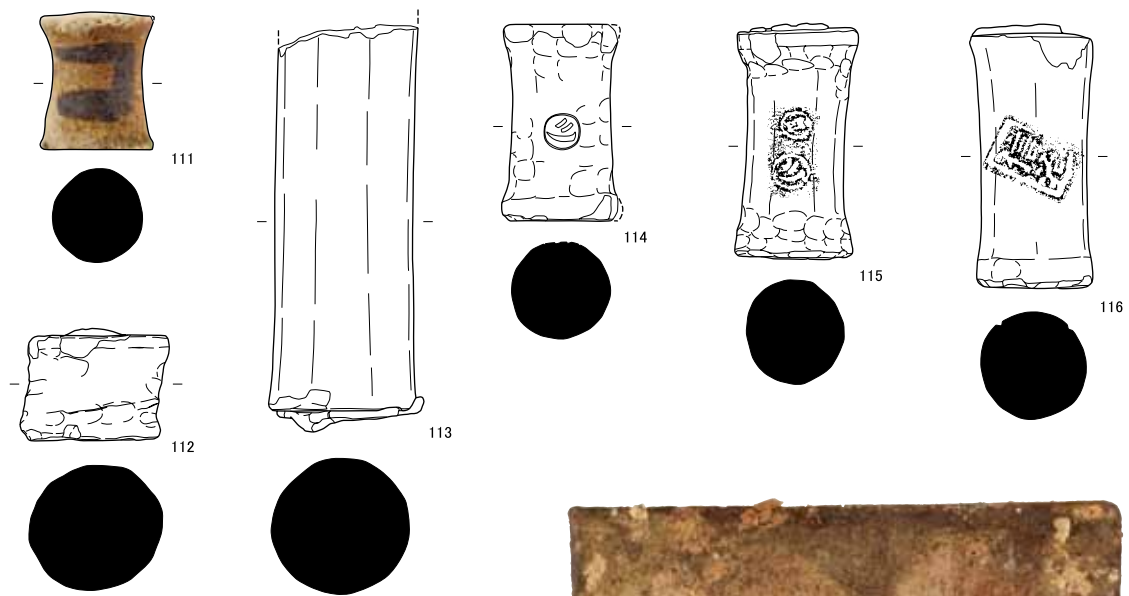


その他の製品実測図2・窯道具類実測図1 (1:4、91・92のみ1:6)

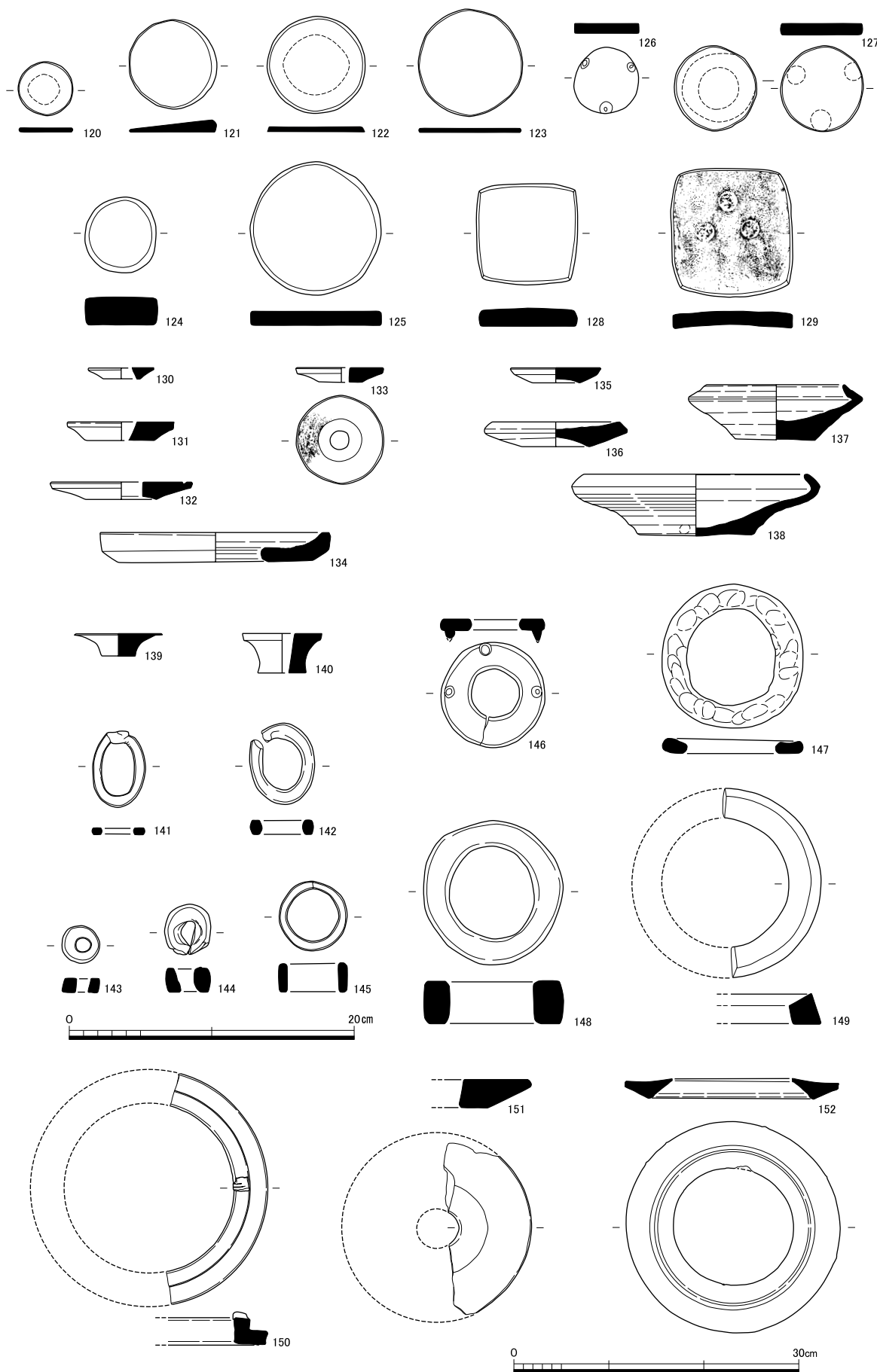


窯道具類実測図2 (1 : 4)

图版 18  
遺物



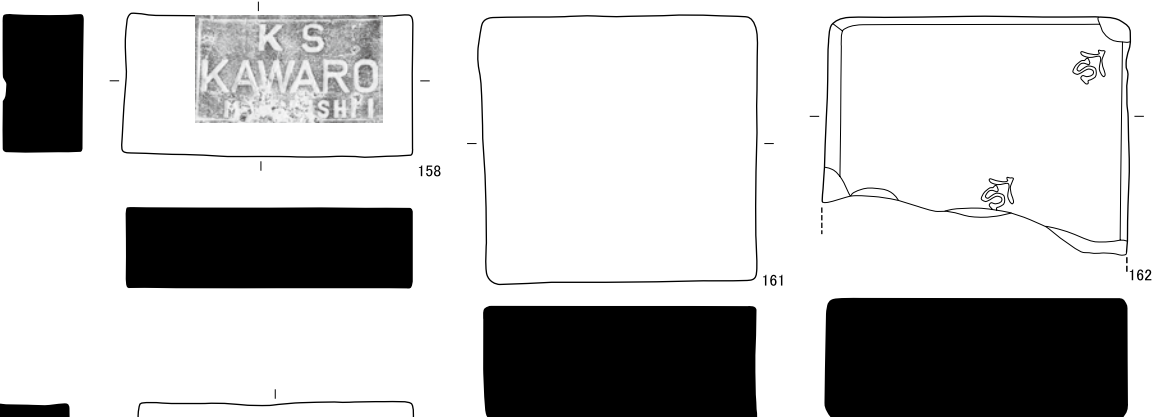
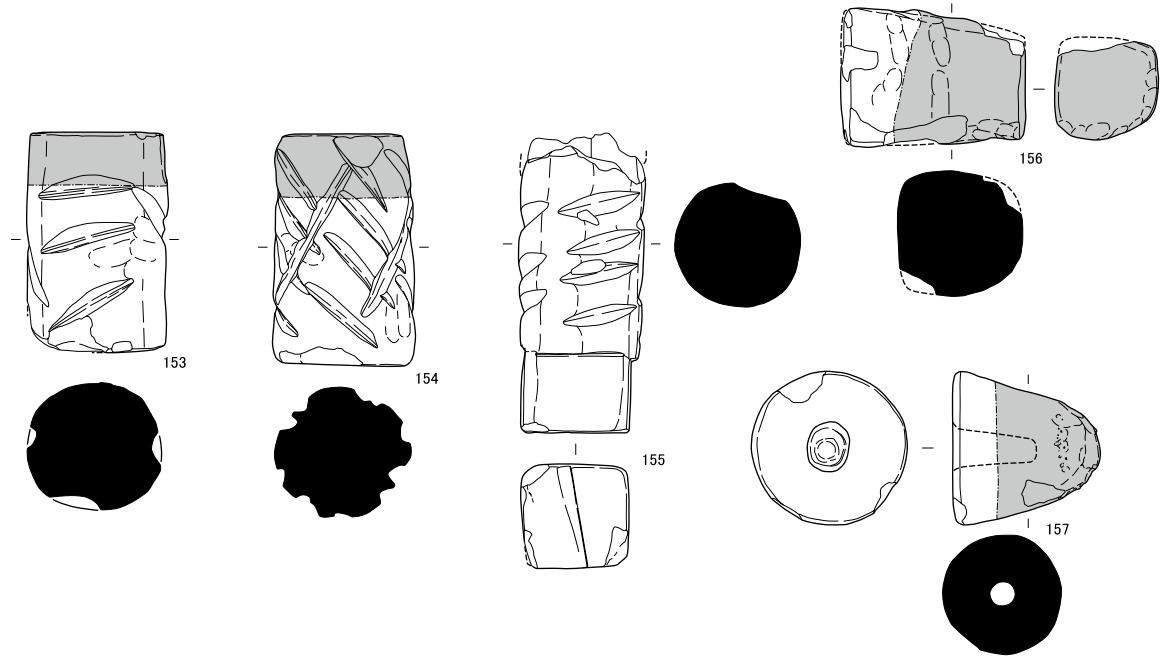
窯道具類実測図3 (1 : 4)



窯道具類実測図4 (1:4、150~152のみ1:6)



図版 20  
遺物



耐火煉瓦実測図 (1 : 6)





1 新段階：全景（南から）



2 新段階：全景（南東から）





1 新段階：前庭部・焚口（南西から）



2 新段階：桐木間（西から）



3 新段階：焚口（南西から）





1 新段階：三の間（南西から）



2 新段階：一の間（南西から）



3 新段階：二の間東入口（南東から）





1 新段階：六の間・煙室（南西から）



2 土台（石垣）（南東から）





1 中段階：全景（南東から）



2 中段階：胴木間西側スロープ（南西から）





1 中段階：焼成室基底部（南東から）



2 中段階：三の間基底部（南東から）



3 新段階：煙室と中段階：土台（石垣）（西から）





1 古段階：前庭部（南から）



2 古段階：排水設備（南西から）





1 古段階：東側スロープ（西から）



2 古段階：排水設備（北から）

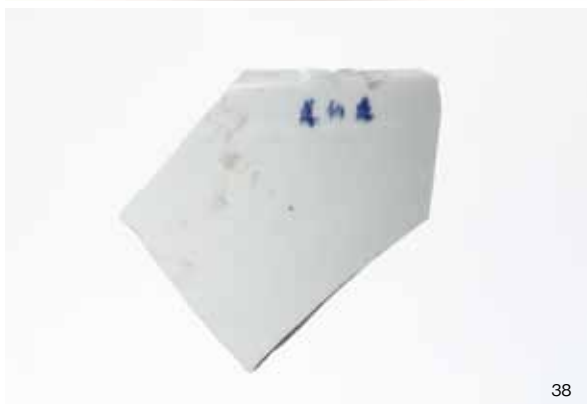


3 古段階：土台（南東から）



4 中・古段階：北側土台（石垣）（北東から）





施釉陶器・理化学陶磁器・栓・土型・窯道具



1 窯道具



2 耐火煉瓦

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	おとわ・ごじょうざかかまあと（どうせんよう）							
書名	音羽・五条坂窯跡（道仙窯）							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2019-13							
編著者名	岡田麻衣子							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2020年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おとわ・ごじょうざか 音羽・五条坂 かまあと 窯跡	きょうとしひがしやまく 京都市東山区 ごじょうぼしひがし ちょうめ 五条橋東4丁目 ばんち 448番地ほか	26100	565	34度 59分 43秒	135度 46分 27秒	2019年10月 17日～2020 年2月14日	157.6㎡	宿泊施設 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
音羽・五条坂 窯跡	窯跡	室町時代		土師器		近代の京式登り窯の全面発掘を行った。窯の3時期の変遷を明らかにし、前庭部の下層で排水設備を検出した。窯の傾斜面を造る為の大規模な盛土(土台)を確認した。		
		幕末～ 明治時代初頭	前庭部、窯、土台(石垣)、水溜、土坑、焼土面	施釉陶器、磁器、染付磁器、理化学陶磁器、土製品、窯道具、煉瓦				
		明治時代～昭和時代	前庭部、窯、土台(石垣)	土師器、陶器、施釉陶器、磁器、染付磁器、理化学陶磁器、土製品、窯道具、煉瓦				
		昭和時代	前庭部、窯、土台(石垣)	土師器、施釉陶器、磁器、染付磁器、理化学陶磁器、土製品、窯道具、煉瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019-13

音羽・五条坂窯跡（道仙窯）

発行日 2020年6月30日

編集  
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961